和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報1

―― 昭和63（1988）・平成元（1989）年度 ――

車駕之古址古墳

1992

財団法人 和歌山市文化体育振興事業団

序　　文

紀伊半島の中央部を西流して紀伊水道へ注ぐ紀ノ川は、その流域に平地をもち、人々に生活の場を与え続けてきました。特に、河口部には肥沃な平野部を形成し、周辺には古代より多くの人々が生活し、彼らの活躍の舞台となりました。

近畿地方で最初に発見された縄文時代の貝塚である鳴神貝塚、県下において最大級の弥生集落である太田・黒田遺跡、古墳総数が600基を越える岩橋千塚古墳群、馬冑をはじめ優れた馬具や武具を副葬していた大谷古墳など、当和歌山市はまさに古代よりの歴史の宝庫を所有していると言えます。

私達は、地下に埋もれている貴重な文化遺産を保存し、後世に継承していかなければなりません。年々、増加しつつある発掘調査の内容を伝えるために、この年報を刊行することとなりました。

発掘調査の実施に際し、御協力を賜った関係各位に深謝するとともに、本書がより広く活用されますよう切望いたします。

平成４年３月31日

財団法人　和歌山市文化体育振興事業団

理事長　　海野　榮喜男

例　　言

1. 本書は、昭和63（1988）年度と平成元（1989）年度に実施した和歌山市内における埋蔵文化財発掘調査の概要を掲載するものである。
2. 各調査については担当者が構成・執筆し、文末に氏名を記載した。
3. 本書に掲載の調査について、報告書が刊行された際には、その報告書をもって正式報告とする。
4. トレンチとは溝掘りによる調査区で、グリッドとは坪掘りによる調査区を指すが、対象地の状況や調査の進行状況にもより厳密には規定できない。よって、調査時の設定に従って使用した部分が多い。略号としてグリッドはG、トレンチはTを使用することがある。
5. 遺構の略号として、柱穴はＰ－、住居・建物はＳＢ－、溝はＳＤ－、定形・不定形の掘り込みを土坑としてＳＫ－、不明遺構・特殊遺構はＳＸ－等を使用することがある。
6. 本書の全体的な編集は、前田敬彦が担当した。

本文目次

Ⅰ．㈶和歌山市文化体育振興事業団の概要……1
Ⅱ．埋蔵文化財の発掘調査概要……2
　Ａ．昭和63（1988）年度の調査……2
　Ｂ．平成元（1989）年度の調査……5
　1．太田・黒田遺跡　第22次調査……6
　2．六十谷古墳群　発掘調査……8
　3．木ノ本Ⅱ遺跡　発掘調査……10
　4．秋月遺跡　第５次調査……12
　5．木ノ本Ⅲ遺跡　第３次調査……14
　6．史跡和歌山城　第９次調査……18
　7．木ノ本Ⅲ遺跡　第４次調査……20
　8．園部・六十谷地区　遺跡確認調査……22
　9．奥山田遺跡　第３次調査……24
　10．有功地区　遺跡確認調査……28
　11．鳴神Ⅳ遺跡　発掘調査……30
　12．鳴神Ⅳ遺跡　第２次・鳴神Ⅴ遺跡　第１次調査……32
　13．大川西方遺跡　確認調査……34
　14．車駕之古址古墳　第１次調査……36
　15．木ノ本Ⅱ遺跡　第２次調査……38
　16．鷺ノ森遺跡　第１次調査……40
　17．木ノ本Ⅲ遺跡　第５次調査……42
　18．菖蒲谷遺跡　確認調査……44
　19．木ノ本Ⅲ遺跡　第６次調査……46
　20．鳴神Ⅳ遺跡　第３次調査……48
Ⅲ．普及啓発活動……50

Ⅰ．㈶和歌山市文化体育振興事業団の概要

1．設立趣旨

和歌山市の文化体育の振興と健康で豊かな市民生活の向上に寄与するため次の事業を行います。

①市民文化体育活動の振興に関する事業

②文化体育施設の管理運営に関する事業

③文化財に関する事業

④その他必要な事業

2．事業内容（埋蔵文化財関係）

①埋蔵文化財発掘調査事業

②出土遺物整理事業

3．設立年月日

昭和63（1988）年4月1日

4．出資者

和歌山市

5．基本財産

2500万円

6．所在地

和歌山市西汀丁29番地

7．事務局組織図（埋蔵文化財関係）

（昭和63年度）

理事長　海野榮喜男
事務局長　岡本正茂
総務課長　尾﨑好昭
- 主　事（埋蔵文化財事務担当）　小松義博
- 学芸員（埋蔵文化財発掘調査担当）　前田敬彦
- 学芸員（埋蔵文化財発掘調査担当）　益田雅司

（平成元年度）

理事長　海野榮喜男
事務局長　岡本正茂
総務課長　尾﨑好昭
- 主　事（埋蔵文化財事務担当）　小松義博
- 学芸員（埋蔵文化財発掘調査担当）　前田敬彦
- 学芸員（埋蔵文化財発掘調査担当）　益田雅司

II. 埋蔵文化財の発掘調査概要

A. 昭和63(1988)年度の調査

本年度の調査は9件が挙げられるが、木ノ本周辺が3個所、六十谷周辺が2個所、また岩橋千塚古墳群の西方の太田・黒田遺跡と秋月遺跡で調査が実施され、これらの3地域で集中して発掘調査が行われたこととなった。六十谷古墳群、園部・六十谷地区、奥山田遺跡が丘陵部の調査である以外は平野部の調査である。また、秋月遺跡の調査が和歌山市教育委員会による調査（担当　大野左千夫氏）である以外は、事業団の受託事業である。

縄文時代としては、奥山田遺跡（第3次）において凹基無茎式石鏃がまとまって確認されたことが挙げられる。確実に縄文時代前期の鍬形鏃がみられるとともに石材としてサヌカイトのみならずチャートや石英のものがみられるのは注意される。

弥生時代としては、太田・黒田遺跡（第22次）と奥山田遺跡で円形住居が検出され、太田・黒田遺跡からは大形石包丁も出土している。

古墳時代としては、埴輪をもつ中期の古墳群である六十谷古墳群、横穴式石室や小竪穴式石室、周溝等をもつ3基の古墳と滑石製紡錘車を含む祭祀土坑が発見された奥山田遺跡、古墳時代の包含層と滑石製臼玉が検出された秋月遺跡（第5次）が挙げられる。

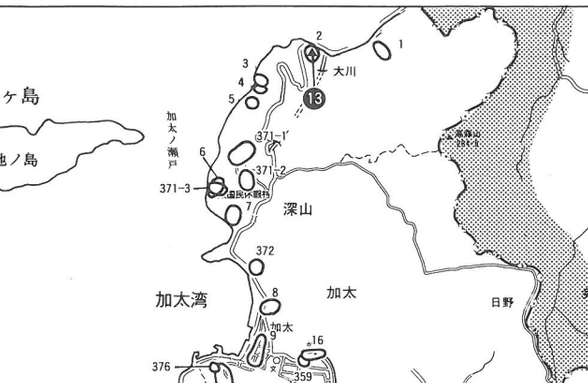
平安時代のものとしては、奥山田遺跡で掘立柱建物が検出されている。また、県下においても出土例の少ない越州窯青磁が出土している点は注目される。

鎌倉～室町時代の調査としては、木ノ本II遺跡、木ノ本III遺跡（第3次）、木ノ本III遺跡（第4次）、奥山田遺跡、太田・黒田遺跡（第22次）がある。木ノ本III遺跡（第3次）では、集石遺構が10基余り、また木ノ本III遺跡（第4次）においても2基の集石遺構が検出された。井戸を再利用したものあるいは方形のプランをもつものなど形・規模も様々ではあるがその目的については検討する必要がある。太田・黒田遺跡（第22次）で検出された幅約2mの直線的にのびる溝からは15～16世紀の遺物が多く出土した。

江戸時代では、和歌山城の調査により和歌山城築城当初とみられる石垣裾部が検出された。

番号	調査名	原因	期間	面積	調査概要	担当
1	太田・黒田遺跡(第22次)	ビル建築	4～5月	210m²	弥生時代の円形住居跡3棟。中世の溝。	大野
2	六十谷古墳群発掘	造成計画	5月	450m²	1号墳より円筒埴輪片1点。2号墳は埴輪列と葺石をもつ前方後円墳。	前田
3	木ノ本II遺跡発掘	住宅建設	6～7月	48m²	中世の包含層。	益田
4	秋月遺跡(第5次)	日進中学校下足箱施設建築	7月	8m²	古墳時代の包含層。滑石製臼玉。	大野
5	木ノ本III遺跡(第3次)	住宅建設	8～10月	600m²	中世の集石遺溝10基余り。井戸。	益田
6	史跡和歌山城(第9次)	電柱移設、ケーブル埋設工事	10～11月	47m²	和歌山城築城期の石垣下端部検出。	前田
7	木ノ本III遺跡(第4次)	住宅建設	12月	23.5m²	集石遺溝2基。円筒埴輪片。	益田
8	園部・六十谷地区遺跡確認	造成計画	12～3月	試掘　53m² 踏査20万m²	(試掘)遺物なし (踏査)散布地1ヶ所（チャート、石槍片、土鍋)。緑色片岩板材。	前田
9	奥山田遺跡(第3次)	宅地開発	1～6月	3,000m²	弥生時代円形住居跡1棟。古墳3基。平安～鎌倉時代の掘立柱建物11棟以上。	前田

和歌山市遺跡分布図



凡例

- 府県界
- 都市界
- 町村界
- JR線
- 私鉄線
- 有料道路
- 国道
- 主要道路
- その他道路
- 県庁
- 市役所
- 支所
- 出張所
- 警察署
- 郵便局
- 学校
- 病院

※遺跡番号は「和歌山県遺跡地名表」和歌山県教育委員会（1989）による。

※白ヌキ数字は調査地点

1：80,000

この地図の作成に当っては建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図及び5万分の1地形図を使用しました。（測量法第30条に基づく成果使用承認平5近使第19号）
この地図の無断複製を禁じます。1993-9

和歌山市遺跡地名表（「和歌山県遺跡地名表」和歌山県教育委員会〈1989年〉より作成。一部訂正、追加。）

遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称
1	報恩講寺遺跡	45	木本小学校Ⅰ遺跡	93	田屋遺跡	135	山口7号墳	177	河南中学校北方遺跡	249	城ケ森3号墳	292	曽垣田Ⅱ遺跡	336	天神山古墳	376	行者堂東遺跡
2	大川西方遺跡	46	木本小学校Ⅱ遺跡	94	府中Ⅱ遺跡	136	山口8号墳	178	和佐中遺跡	250	城ケ森遺跡	293	曽垣田古墳	337	秋葉山貝塚	377	松江経塚
3	藻江遺跡	47	榎原遺跡	95	府中Ⅲ遺跡	137	山口9号墳	179	和佐寺跡	251	相坂古墳	294	城ノ前Ⅱ遺跡	338	アンドの鼻古墳	378	猊口石岩陰遺跡
4	しょうぶ谷遺跡	48	中野遺跡	96	府中遺跡	138	山口10号墳	180	禰宜1号墳	252	千石山5号墳	295	城ノ前Ⅰ遺跡	339	三田1号墳	379	和歌山城跡
5	水谷遺跡	49	城山古墳	97	北山Ⅰ遺跡	139	山口11号墳	181	禰宜2号墳	253	千石山古墳群	296	大池遺跡	340	三田2号墳	380	山口御殿跡
6	男良の谷遺跡	50	権現山1号墳	98	北山1号墳	140	山口廃寺跡	182	和坂古墳	254	菖蒲谷遺跡	297	赤津古墳群	341	三田3号墳	381	岩橋Ⅱ遺跡
7	深山遺跡	51	権現山2号墳	99	北山2号墳	141	中筋日延遺跡	183	和佐古墳群	255	吉礼Ⅲ遺跡	298	吉礼貝塚	342	三田4号墳	382	本願寺跡
8	大谷川遺跡	52	高芝遺跡	100	北山3号墳	142	山口遺跡	184	花山古墳群	256	千石山遺跡	299	西吉礼遺跡	343	吉原古墳	383	神前Ⅱ遺跡
9	加太遺跡	53	高芝古墳群	101	北山4号墳	143	谷遺跡	185	岩橋千塚古墳群	257	井戸1号墳	300	東吉礼遺跡	344	広原古墳	384	高松焼窯跡
10	加太南遺跡	54	栄谷貝塚	102	北山5号墳	144	里遺跡	186	井辺前山古墳群	258	井戸2号墳	301	和田遺跡	345	内原古墳	385	奥山田古墳群
11	平の谷遺跡	55	貴志古墳	103	北山Ⅱ遺跡	145	川辺遺跡	187	寺内古墳群	259	井戸3号墳	302	和田岩坪遺跡	346	内原遺跡	386	大池遺跡
12	田倉崎Ⅰ遺跡	56	川原崎遺跡	104	北山6号墳	146	藤田古墳	188	森小手穂遺跡	260	馬場古墳	303～304	和田古墳群	347	名草貝塚	387	大旗山城跡
13	田倉崎Ⅱ遺跡	57	川原崎1号墳	105	直川八幡山1号墳	147	硲古墳	189	寺内ナイフ形石器出土地	261	馬場遺跡	305	竈山神社古墳	350	高津子山古墳	388	西田井遺跡
14	船出遺跡	58	川原崎2号墳	106	直川八幡山2号墳	148	藤田遺跡	190	頭陀寺ナイフ形石器出土地	262	東池1号墳	306	坂田地蔵山古墳	352	金谷廃寺跡	389	井ノ口遺跡
16	加太駅北方遺跡	59	川原崎3号墳	107	直川八幡山3号墳	149	宇田森遺跡	209～215	山東古墳群	263	東池2号墳	307	神前遺跡	353	興徳寺跡	390	神波遺跡
17	藻崎北浜遺跡	60	国有本遺跡	108	直川八幡山4号墳	150	上野廃寺跡（紀伊薬師寺跡）	218	若林古墳群	264	東池3号墳	308	井辺遺跡	356	太田城跡	391	永穂遺跡
18	藻崎南浜遺跡	61	大谷古墳	108-2	直川八幡山14号墳	151	上野遺跡	219	吉礼砂羅谷窯跡	265	東池4号墳	309	岡崎縄文遺跡	357	山崎山古墳群	392	楠本遺跡
19	藻崎西方遺跡	62	晒山古墳群	109	直川八幡山5号墳	152	上黒谷遺跡	220	平尾1号墳	266	吉里銅鐸出土地	310	森小手穂埴輪窯跡	358	山東中遺跡	393	吉田遺跡
20	神前東浜遺跡	63	慶円寺裏山古墳	110	直川八幡山6号墳	153	北野窯跡	221	平尾2号墳	267	小山古墳	311	大日山Ⅰ遺跡	359	加太Ⅱ遺跡	394	城山遺跡
21	神前西浜遺跡	66	雨が谷古墳群	111	直川八幡山7号墳	154	北野遺跡	222	平尾3号墳	268	奥須佐窯跡	312	井辺Ⅰ遺跡	360	雨が谷遺跡	395	岡村遺跡
22	屋敷浜遺跡	70	楠見遺跡	112	直川八幡山8号墳	154-2	北野Ⅱ遺跡	226	楠古墳群	269	円満寺古墳	313	井辺Ⅱ遺跡	361	冬野遺跡	396	室山古墳群
23	おそ越の鼻遺跡	71	鳴滝古墳群	113	直川八幡山9号墳	155	若宮池遺跡	227	足守神社古墳群	270	峯古墳	314	鳴神Ⅱ遺跡	362	鳴滝遺跡	指1	史跡和歌山城
24	一色谷遺跡	72	奥出古墳	114	直川八幡山10号墳	156	上三毛遺跡	228	赤山古墳	271	西光寺窯跡	315	鳴神Ⅲ遺跡	363	園部円山古墳		
25	柏の浜遺跡	73	有功経塚	115	直川八幡山11号墳	157	下三毛遺跡	229	塩谷1号墳	272	吉里1号窯跡	316	鳴神Ⅳ遺跡	364	西庄Ⅱ遺跡		
26	深蛇池遺跡	74	薗部Ⅰ遺跡	116	直川八幡山12号墳	158	小山古墳	230	塩谷2号墳	273	吉里2号窯跡	317	鳴神貝塚	365	永山遺跡		
27	垂水遺跡	75	薗部古墳	117	直川八幡山13号墳	159	寺山古墳群	231	塩谷3号墳	274	頭陀寺古墳	318	鳴神Ⅴ遺跡	366	永山古墳		
28	神島遺跡	76	薗部Ⅱ遺跡	118	八王寺山古墳群	160	東国山古墳群	232	塩谷4号墳	275	頭陀寺遺跡	319	音浦遺跡	367	井辺Ⅲ遺跡		
29	沖の島北方海底遺跡	77	有功遺跡	119	橘谷Ⅰ遺跡	161	宮山古墳群	233	塩谷5号墳	276	大将軍窯跡	320	鳴神Ⅵ遺跡	368	紀三井寺遺跡		
30	野奈浦遺跡	78	池田遺跡	120	橘谷Ⅱ遺跡	162	小倉古墳群	234	新出古墳	277	有ノ木窯跡	321	岩橋遺跡	369	奥山田遺跡		
31	ハイブの浦遺跡	79	有功古墳	121	橘谷Ⅲ遺跡	163	小倉9号墳	235	明王寺経塚	278	宝光寺跡	322	栗栖Ⅰ遺跡	370	朝日石槍出土地		
32	浜遺跡	80	大同寺墳墓	122	橘谷銅鐸出土地	164	明楽古墳群	236	矢田古墳	279	松原1号墳	323	栗栖Ⅱ遺跡	371	深山要塞跡		
33	磯の浦1号墳	81	大同寺古墳	123	弘西遺跡	165	小倉神社1号墳	237	北池古墳	280	松原2号墳	324	高橋神社遺跡	371-1	深山第1砲台跡		
34	磯の浦2号墳	82	大同寺遺跡	124	北田井遺跡	166	小倉神社2号墳	238	毀山1号墳	281	滝ケ峯古墳群	325	紀の川銅鐸出土地	371-2	深山第2砲台跡		
35	磯の浦3号墳	83	法然寺遺跡	125	別所1号墳	167	モント古墳群	239	殿山2号墳	282	滝ケ峯遺跡	326	有本銅鐸出土地	371-3	男良砲台跡		
36	磯の浦4号墳	84	六十谷遺跡	126	別所2号墳	168	小倉神社境内遺跡	240	殿山3号墳	283	薬勝寺南山古墳群	327	太田・黒田遺跡	372	加太砲台跡		
37	磯脇遺跡	85	和田遺跡	127	別所3号墳	169	金谷遺跡	241	土井山古墳	284	仁井辺遺跡	328	吉田窯跡	373	田倉崎砲台跡		
38	西庄遺跡	86	西辻遺跡	128	上野古墳群	170	奥池遺跡	242	丸山古墳	285	薬勝寺跡	329	鷺ノ森遺跡	374	虎島砲台跡		
39	平の下遺跡	87	川口遺跡	129	山口1号墳	171	高積山遺跡	243	高岡古墳	286	薬勝寺遺跡	330	鷺ノ森窯跡	375	友ケ島要塞跡		
40	木ノ本Ⅰ遺跡	88	六十谷古墳群	130	山口2号墳	172	薬徳寺跡	244	桜山古墳	287	松原Ⅰ遺跡	331	秋月遺跡	375-1	友ケ島第1砲台跡		
41	木ノ本Ⅱ遺跡	89	直川遺跡	131	山口3号墳	173	城ケ峯城跡	245	伊太祈曽神社古墳群	288	松原Ⅱ遺跡	332	津秦遺跡	375-2	友ケ島第2砲台跡		
42	木ノ本Ⅲ遺跡	90	直川廃寺跡（明光寺跡）	132	山口4号墳	174	禰宜Ⅰ遺跡	246	チシヨ古墳	289	薬師谷遺跡	333	岡の里古墳	375-3	友ケ島第3砲台跡		
43	木ノ本経塚	91	高井遺跡	133	山口5号墳	175	禰宜Ⅱ遺跡	247	城ケ森1号墳	290	江南遺跡	334	関戸遺跡	375-4	友ケ島第4砲台跡		
44	釜山古墳群	92	鳥井遺跡	134	山口6号墳	176	禰宜貝塚	248	城ケ森2号墳	291	曽垣田遺跡	335	関戸古墳	375-5	友ケ島第5砲台跡		

B. 平成元(1989)年度の調査

本年度においては、11件の発掘調査が実施された。前年度に引き続き市内北西部の木ノ本地域や岩橋丘陵西の平野部の鳴神地域の調査が多い。有功地区確認調査や菖蒲谷遺跡は丘陵部の調査である。鷺ノ森遺跡は、市街地での本格的な近世城下町の調査の始まりである。また、県下の代表的な古墳のひとつである車駕之古址古墳の調査も始まることとなった。事業としては、すべて事業団の受託事業である（ただし、鷺ノ森遺跡の発掘調査については和歌山市教育委員会職員の大野左千夫氏の派遣を受けている）。

縄文時代～弥生時代の本格的な調査はなかったが、木ノ本II遺跡（第２次）においては沼状地形の堆積土より縄文時代晩期の刻み目突帯文土器が出土し、また中世の溝内埋土からではあるが弥生土器底部が出土した。

古墳時代の調査としては、前記の車駕之古址古墳の調査と鳴神IV遺跡の調査がある。車駕之古址古墳は、開発計画に対処するために詳細な測量図を作成するとともにトレンチ調査を実施したところ、墳丘二段目の葺石が遺存しているのが確認された。鳴神IV遺跡からは、古墳時代後期の溝状遺構とともに炭層を伴う土坑が検出され、注意された。また、鳴神IV遺跡（第３次）調査では古墳時代とみられる溝が検出されている。

平安時代としては、鳴神IV・V遺跡の調査が挙げられる。明確な遺構は検出されなかったが、「多段ヨコナデ技法」による土師器・黒色土器が多く出土した。

鎌倉～室町時代の調査としては、木ノ本II遺跡（第２次）、木ノ本III遺跡（第５次）、木ノ本III遺跡（第６次）、菖蒲谷遺跡がある。検出された遺構は、ほとんどが溝であり、この時期に盛んに開発が行われた様子が窺われる。

江戸時代の調査としては、有功地区、大川西方遺跡と鷺ノ森遺跡が挙げられる。有功地区の確認調査では、近世期とみられる溜池状施設と瓦溜が確認された。鷺ノ森遺跡では、石列遺構とともに17世紀代の土器が多く出土した。大川西方遺跡では、明確な共伴遺物は確認されなかったが、位置・構造よりみて幕末頃の御台場の一部とみられる石垣が検出された。

番号	調査名	原因	期間	面積	調査概要	担当
10	有功地区遺跡確認	市立学校建設	6～7月	100m²	溜池状施設。瓦溜め。	益田
11	鳴神IV遺跡発掘	宅地開発	6月	40m²	古墳時代後期の溝３条。土坑２基。	前田
12	鳴神IV遺跡（第２次）・鳴神V遺跡（第１次）	地方改善施設整備事業	8～10月	400m²	溝状遺構。不定形土坑。平安時代の土器。	益田
13	大川西方遺跡確認	事務所建設	8月	40m²	江戸時代後期の御台場に伴う石垣。	前田
14	車駕之古址古墳（第１次）	宅地開発	12～4月	290m²	墳丘測量。前方部南側斜面の第２段目葺石検出。円筒埴輪・形象埴輪。	前田
15	木ノ本II遺跡（第２次）	事務所建設	12～1月	91m²	鎌倉・室町時代の溝。井戸（？）。江戸時代以降の畝溝。	前田
16	鷺ノ森遺跡（第１次）	住宅建設	1～2月	70m²	石列。江戸時代前期の土器。	大野
17	木ノ本III遺跡（第５次）	共同住宅建設	2月	45m²	鎌倉・室町時代の溝。	益田
18	菖蒲谷遺跡確認	開発計画	2月	30m²	鎌倉時代の溝。	益田
19	木ノ本III遺跡（第６次）	共同住宅建設	3月	32m²	鎌倉・室町時代の溝２条。	益田
20	鳴神IV遺跡（第３次）	宅地開発	3～4月	200m²	溝。	益田

1．太田（おおた）・黒田（くろだ）遺跡　第22次調査

調 査 地　和歌山市太田479－3

調査面積　210m²

位置と環境

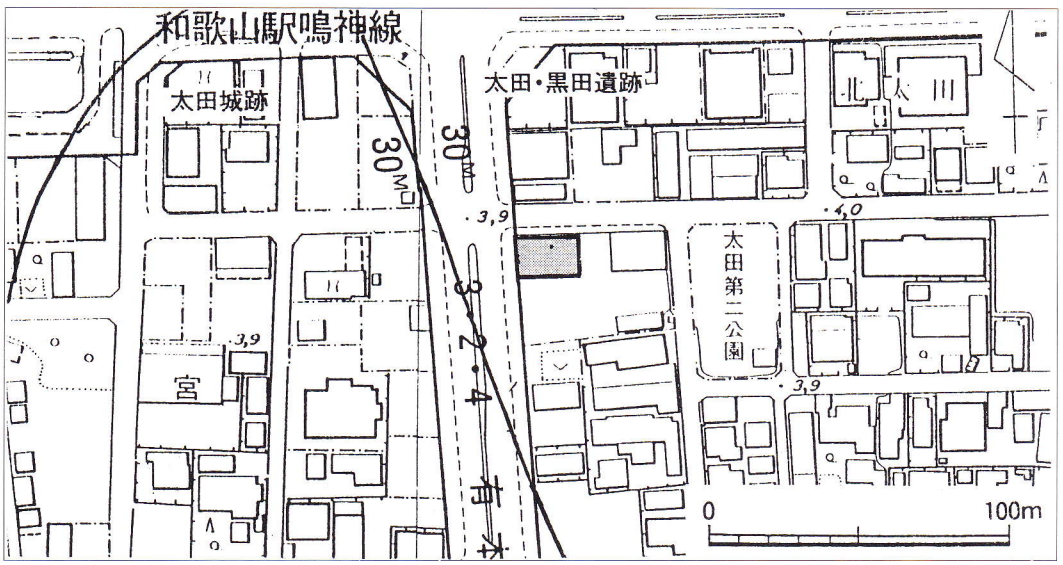
太田黒田遺跡は、紀ノ川平野左（南）岸のほぼ中央部にあり、古環境からみると完新世（沖積）段丘に位置する。JR和歌山駅の東側一帯に広がる遺跡で、本調査当時は既にかなりの部分が市街地化しているが、かつては水田のひろがる近郊農業地域であった。現在の行政区画では和歌山市南黒田・北太田・南太田にわたっている。現在の標高は約3.2～3.6mである。この地域に対する区画整理事業に先立って、1968（昭和43）年から発掘調査が開始された。弥生時代前期に始まる集落遺跡で、その後もほぼとぎれることなく人の居住が続き、各時代の遺構・遺物が検出されている(注1)。近接する遺跡としては、南東約500mに、古墳時代を中心とした集落遺跡（古墳群を伴う）である秋月遺跡がある。本調査は、企業社屋建築に先立つものである。

調 査 内 容

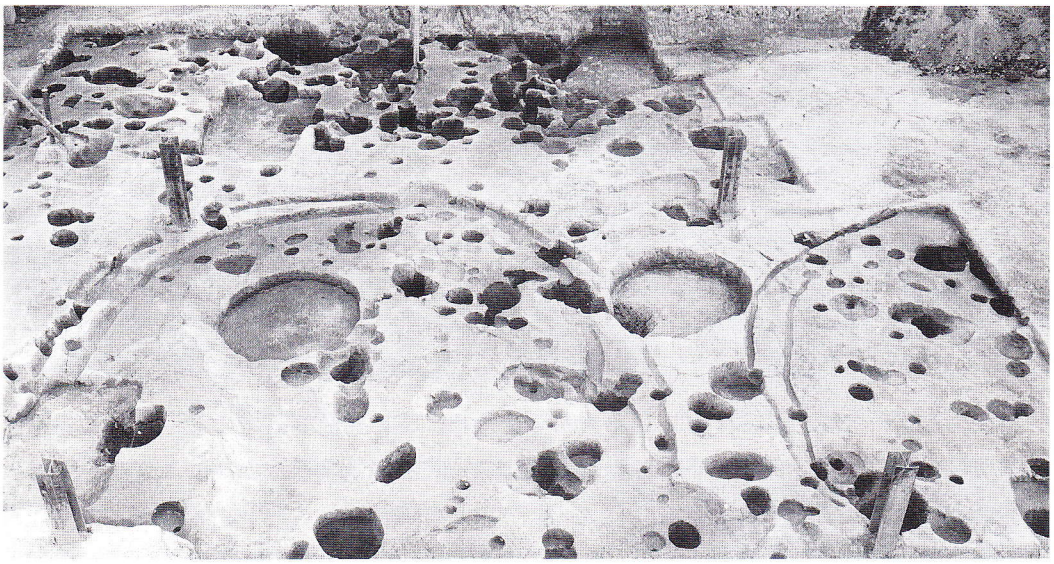
本調査で検出された主な遺構は、弥生時代中期の竪穴住居跡３軒、古墳時代後期の柱穴９個、中世の溝１本がある。

１号住居跡は、調査区域の東側で検出され約1/2を調査した。壁は削平され、壁溝も一部で確認されただけであるが、床面には多数の柱穴状ピットが検出された。これらのピットは、２～３個ないし６～７個が重複している。炉穴は、調査区域東壁面にかかって検出された。ピットとの重複関係から北側のものが古く、南側のものが新しいことがわかる。南側の炉は２個が重複している。直径約12mある。

２号住居跡は、調査区域の中央で検出され、約3/4が確認された。壁は削平されていたが、壁溝が２本検出され、その重複関係から南側へ約50cm移していることが確認された。



調査地の位置



調査地風景（西から。左が２号住居跡、右が３号住居跡。）

床面にはいくつかの柱穴状ピットが検出されたが、何本柱かは確認できなかった。西側の一部は中世の溝と重複する。直径約６ｍある。

３号住居跡は、２号住居跡の南側に接して検出され、約1/4を調査した。壁溝は２本検出された。南側のものは貼り床によって埋められており、北側へずらして建てかえられたことを示している。床面近くからサヌカイトチップがかなり出土した。直径約７ｍある。

柱穴は約50cm角の方形の掘肩をもつピットで、ほぼ中央に直径約20cmの柱痕がみられた。須恵器・土師器の細片が出土した。掘立柱建物の柱穴とみられるが建物規模はわからない。

溝状遺構は、調査区域の西側を南北に走っており、幅1.5～２ｍ・深さ約70cm・長さ17ｍ以上ある。覆土から巴文軒丸瓦・中国産陶磁器（染付皿・白磁皿・青白磁梅瓶など）・日本産陶器（瀬戸美濃産天目碗・灰釉皿）・瓦質土器・銅銭・茶臼・漆器椀などが出土した。埋没は16世紀後半である。(注２)

ま と め

本調査で検出された竪穴住居跡は、弥生時代中期中葉～後半のものと考えられる。1978年に本調査区域の西隣接地で実施した第12次調査で弥生時代中期の井戸跡とみられる土坑が検出されており、これらは現在のところ太田・黒田遺跡で最も西側の弥生時代の居住区域を形成するものである。古墳時代の柱穴は、どのような建物を形成するものかわからないが、太田・黒田遺跡では初めての検出例である。中世の溝は人工的な水路と考えられるが、覆土中に指頭大の焼土がかなり混っており、火災の処理土で埋められたことを示している。（大野左千夫）

（注１）森浩一・白石太一郎「南近畿における前・中期弥生式土器の一様相」『考古学ジャーナル』33（1969）

森浩一・大野左千夫「和歌山市太田黒田遺跡」『日本考古学年報』21・22・23合併　日本考古学協会（1976）

（注２）大野左千夫「中世の主な遺跡と遺物」『和歌山市史』第１巻　和歌山市（1993）

2．六十谷（むそた）古墳群 発掘調査

調 査 地　和歌山市六十谷1336他

調査面積　450m²

位置と環境

六十谷古墳群は、和泉山脈から南へ派生する丘陵上の尾根線上に立地する古墳群で、標高約95m～105mに所在する。東約500mの丘陵上には北山古墳群、東１kmには直川八幡山古墳群が所在する。

六十谷古墳群は、遺跡地図による「六十谷古墳」の所在地であったが、調査の進行に伴い、もう１基の古墳が存在することが判明したため、先に確認されていた「六十谷古墳」を六十谷１号墳とし、新たに発見された古墳を六十谷２号墳と呼称した。

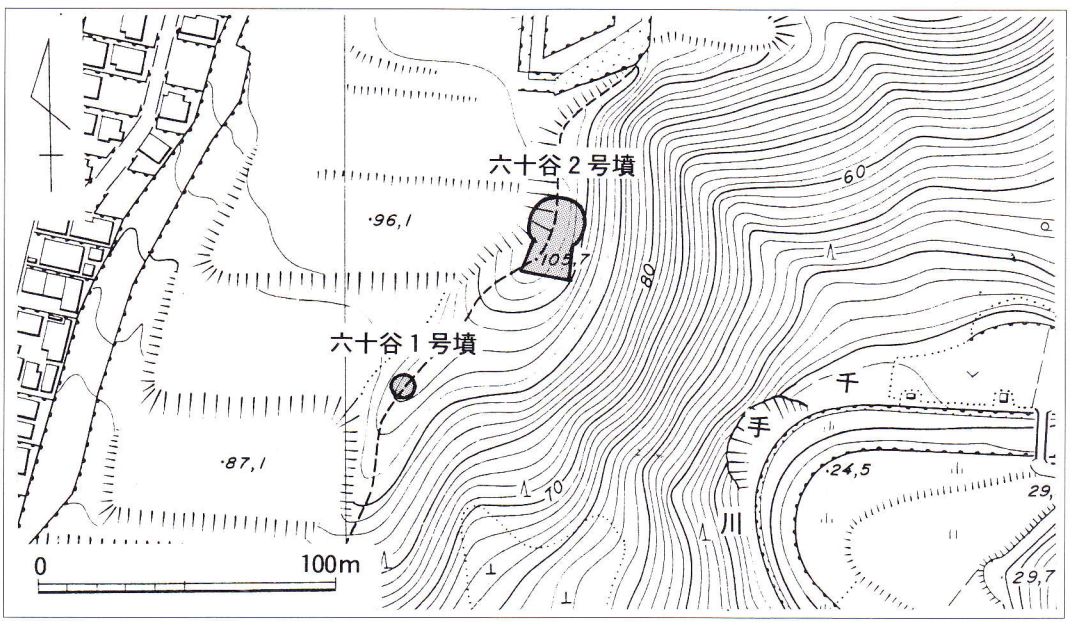
調 査 内 容

六十谷１号墳は標高約96mの尾根上に立地する古墳である。調査により主体部は検出されなかったが、岩盤整形の状況と２点の埴輪出土位置よりみて直径約10mの円墳であったと推定された。

出土した埴輪は、断面台形の安定したタガがみられ、２次調整にヨコハケが施される。

六十谷２号墳は１号墳から丘陵上を北東方向へ50m、標高にして約10m高い位置にある。この地点は、和泉山脈から南へ延びてきた尾根の先端に相当し、眼下に紀ノ川流域の平野部を見下ろすことができる。

調査により、古墳側面の葺石と埴輪列の一部が確認され、本古墳が復元全長約27m、後円部直径約17m、くびれ部幅11mを測る前方後円墳であることが判明した。



調査地の位置

六十谷１号墳（北より）

六十谷２号墳 遠景（北より）

本古墳もまた、主体部が検出されなかったが、埴輪類が比較的多く出土した。種類としては、円筒埴輪、朝顔形埴輪、蓋形埴輪、盾形埴輪、家形埴輪等が挙げられる。円筒埴輪は、１次調整に条線密度の高い原体によるタテハケ、ナナメタテハケがみられ、有黒斑のものがみられる。

ま と め

調査により２基の古墳が確認された。１号墳の時期としては出土した円筒埴輪が川西宏幸氏の編年[注１]によるⅢ期に相当することより５世紀前葉、２号墳については、円筒埴輪が川西編年のⅡ期の新しい段階にほぼ相当し、蓋形埴輪が松木武彦氏の分類[注２]による津堂城山タイプの古段階に該当することより５世紀初頭頃とみられる。よって、この２基については、２号墳から１号墳へと継続的に築造された小規模な古墳群と考えられる。２号墳は、当該時期の古墳の中では、葺石と埴輪をもつ稀少な例であり、特に埴輪群は県下においても最古級のものであり重要である。

（前田敬彦）

（注１）川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64－２（1978）

（注２）松木武彦「１　蓋形埴輪の変遷と画期―畿内を中心に―」『鳥居前古墳』大阪大学文学部考古学研究室（1990）

六十谷２号墳 西葺石

六十谷２号墳 円筒埴輪

3. 木ノ本（きのもと）II遺跡 発掘調査

調 査 地　和歌山市木ノ本519－3
調査面積　48m²

位置と環境

木ノ本II遺跡は和歌山平野を東西に流れる紀ノ川の河口北岸、標高約4mの沖積平野に立地する東西830m、南北340mを範囲とした古墳時代から中世にかけての散布地として知られている。

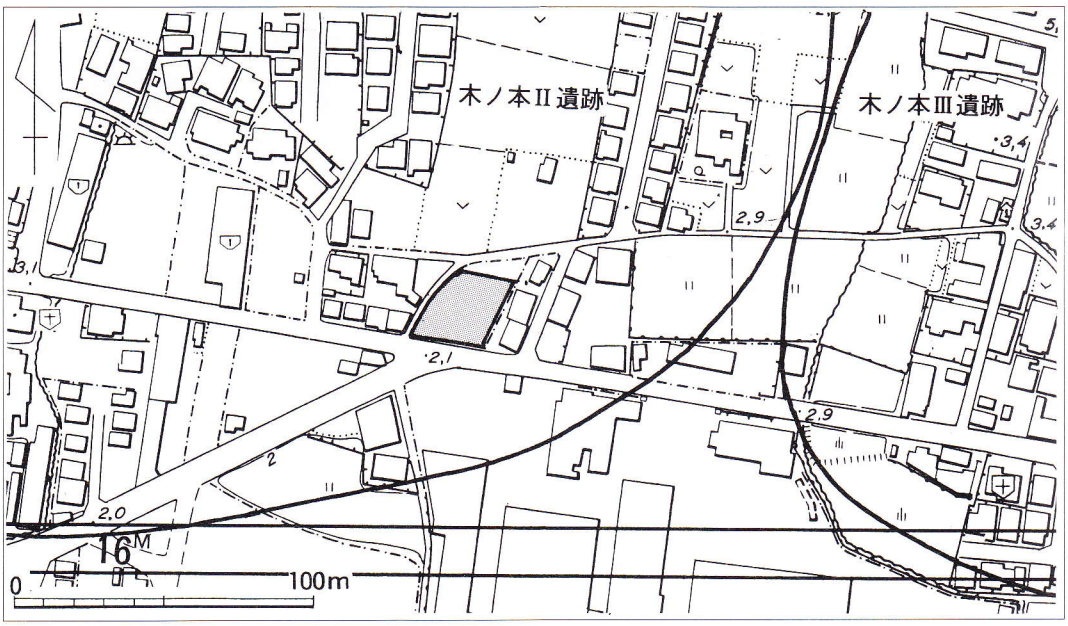
本遺跡の周辺は和泉山脈に沿って遺跡が連続して存在しており、西方には中世の集落跡が発掘調査で確認された西庄遺跡や、製塩遺跡が点在する加太・友ヶ島遺跡が知られ、東方では木ノ本古墳群、大谷古墳、楠見遺跡と続く和歌山平野の歴史を探る上で重要な地域である。

調 査 内 容

調査地点は木ノ本III遺跡と接する本遺跡の南東隅にあたり、住宅建設に伴う調査として柱の基礎部分と浄化槽設置予定地について掘り下げた。

地表から1～1.5mの厚さの盛土、その下に約30cmの旧耕作土があり、その下に遺物包含層が堆積していた。包含層直上からの湧水が著しく、遺構の検出が困難であったためやむなく壁面での層位の確認するに留まった。

包含層は約50cmの厚さを測り、土質により上層の砂質土と下層の粘質土の2層に分けられたが、出土遺物にはそれほどの違いがなく沈殿物の差によるものと思われる。その下



調査対象地の位置

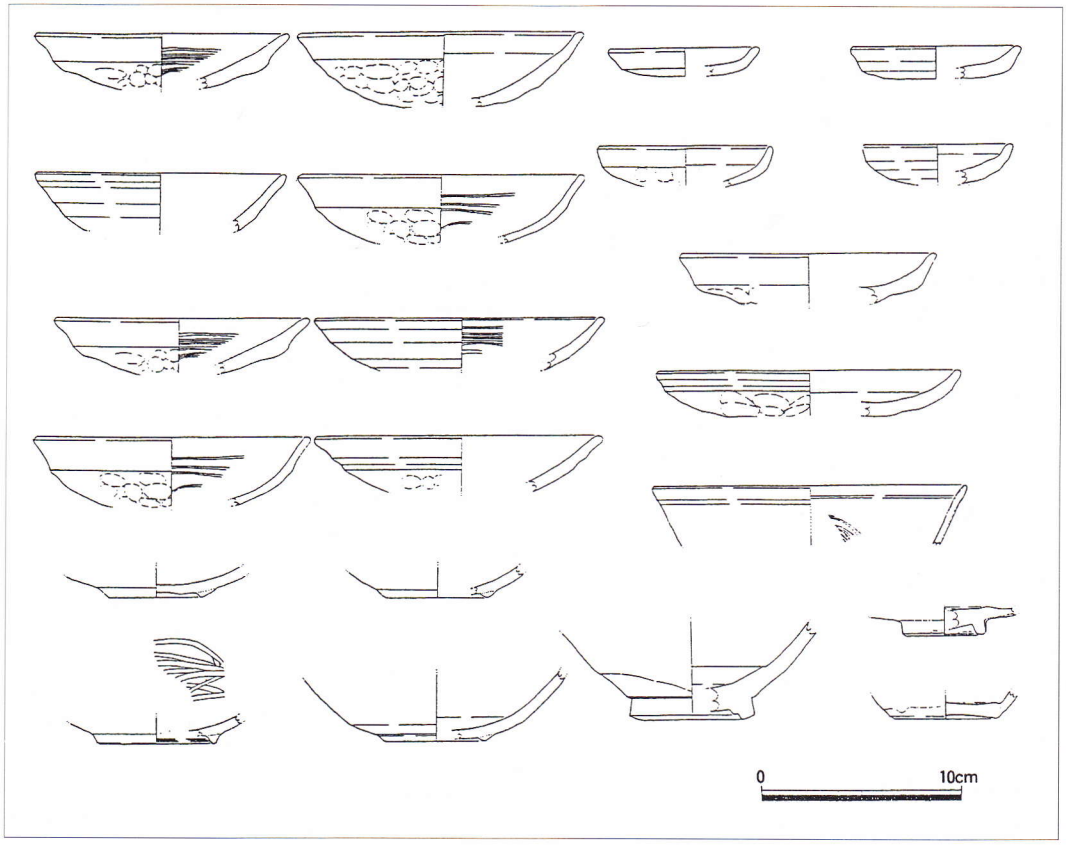
は青灰色砂層となり、水が噴水のように湧き出すので無遺物層であることを確認して掘り下げを中止した。一部遺物包含層と青灰色砂層の間に植物遺体のみを含む粘土層が約１ｍの厚さで存在し、西側に薄くなるという起伏の大きい地形であったことを示している。

出土遺物は瓦器、瓦、土師器、須恵器、黒色土器、輸入陶磁器、国産陶磁器、竈、火舎、製塩土器、土錘、木製品、植物遺体、砥石、骨など13～14世紀代の生活雑器を中心にコンテナ２箱分に相当する量で出土した。いずれも破片ばかりで完形のものは皆無であったが、瓦器がその大多数を占める。

ま と め

今回の調査は面積も少なく、また湧水のために平面の観察が十分に行えなかったが、中世の集落跡が検出された西庄遺跡に近接した当地からほぼ同時期の遺物が数多く出土したことは、その当時の生活環境を考える上で注目される。また出土遺物の中に木製品や植物遺体が少なからず混在していることは、日下雅義氏が指摘されたように和泉山脈と紀ノ川河口に挟まれた低湿地であったことを裏付けるものであり、これより北側の山麓際にそって生活空間が存在した可能性を十分に示している。以上のことからも、周辺地域を含めた詳細な調査が重要である。

（益田雅司）



出土遺物

4．秋月（あきづき）遺跡 第５次調査

調 査 地　和歌山市秋月365
調査面積　８㎡

位置と環境

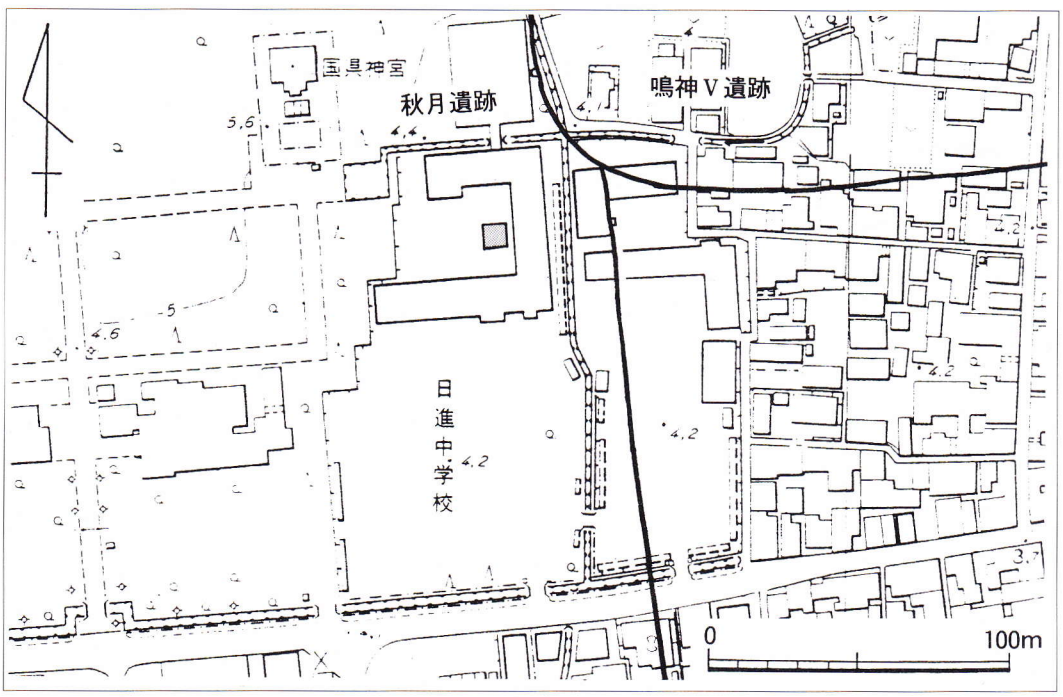
日前宮を中心とする秋月遺跡は、岩橋千塚古墳群の西約１kmの平野部に位置する。遺跡の西には、和歌山県立向陽高校が、遺跡の東には和歌山市立日進中学校が存在している。昭和60（1985）年の県立向陽高校の特別教室建設に伴う調査により、古墳時代初頭頃の前方後円型周溝墓が発見され、全国的にみても早い時期の古墳の一形態として注目された。また、日進中学校敷地内における第４次調査においては、古墳時代初頭の庄内式段階の方形竪穴住居が２棟検出されている。

今回は、下足箱施設建設に伴う調査として実施した。

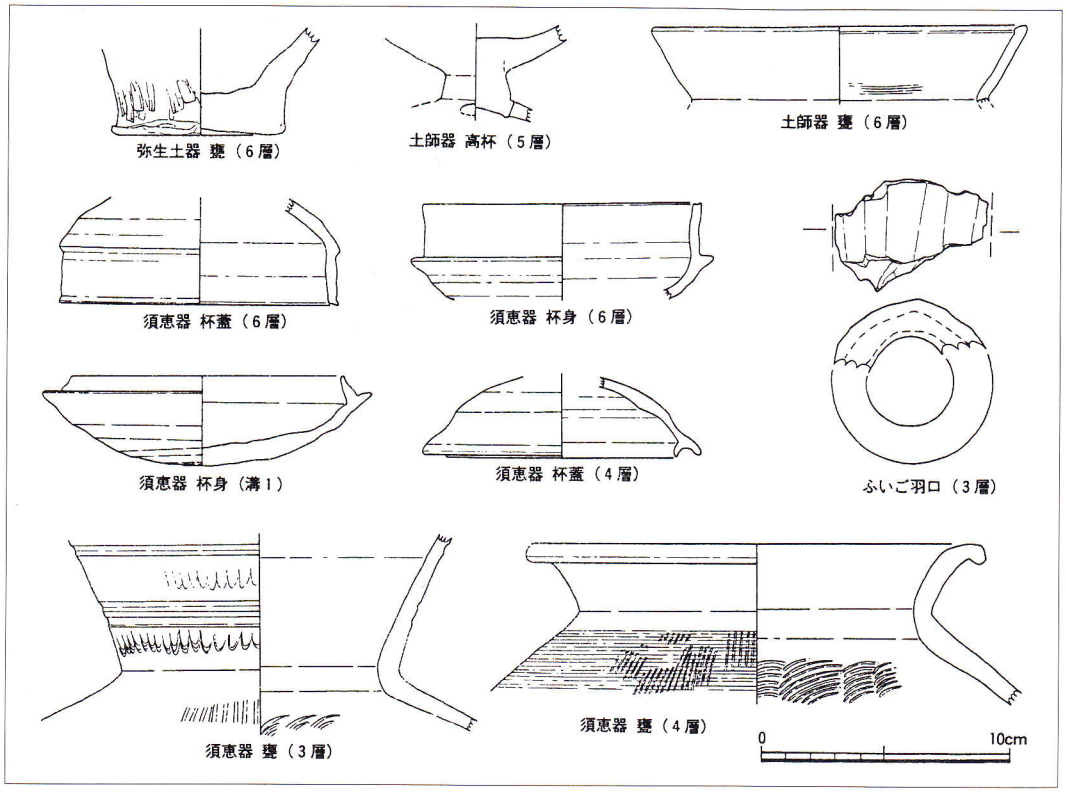
調 査 内 容

校舎の間に挟まれた中庭の施設建設予定地内に２ｍ平方のグリッドを２個所設定し、調査をおこなった。グリッドは、４ｍの距離をおいて東西に設定したが、東側のグリッド１では、調査区内をコンクリートの基礎部分が横切っており、完掘できなかったため、ここでは、堆積状況の判明した西側のグリッド２について触れておく。

グリッド２では、７層の堆積が確認された。上層より、客土（１層）、コンクリート面とそれに伴う整地土（２層）、灰黄色砂質土（３層）、灰茶褐色土（４層）、茶褐色土（５



調査対象地の位置



グリッド2　出土遺物（カッコ内は出土位置）

層)、暗茶褐色土（6層)、灰褐色土（7層）である。1～3層は整地土であり、4層以下が包含層となる。4・5層は須恵器等を含む土にしまりがなく、6層以下が安定した包含層となる。5層と6層の境目が、地表から約1.2mほど下がったレベルとなる。遺構が確認されたのは7層上面であるが、7層も須恵器を含む包含層である。遺構保護のために7層以下の掘り下げはおこなっていない。

7層上面において、溝1基、土坑1基、柱穴1基が検出された。溝1は、調査区の南西コーナーから屈曲して北壁へ向かう浅い溝状遺構で、溝の内部では北西コーナーへ向かって遺構面のレベルが上昇しているのが確認された。南壁より6世紀後半頃の須恵器坏身が出土し、また溝1の西側の7層上面で滑石製臼玉1点が出土した。南東コーナーで検出された土坑1からは6世紀前半頃の須恵器坏身が出土した。

ま と め

完掘は実施しなかったが、調査地付近に古墳時代を中心とする遺構・包含層が良好に遺存しているのが確認された。また、本遺跡及び隣接する鳴神遺跡群からは、臼玉をはじめ勾玉、紡錘車、双孔円板等の滑石製模造品の出土が多く確認される。今回の調査区も極めて小範囲ではあったが、滑石製品の出土が確認された。古墳時代の祭祀を考える上で重要な地域であるとみられる。

（大野左千夫・前田敬彦）

5. 木ノ本Ⅲ遺跡 第３次調査

調 査 地　和歌山市木ノ本674－１他

調査面積　600m²

位置と環境

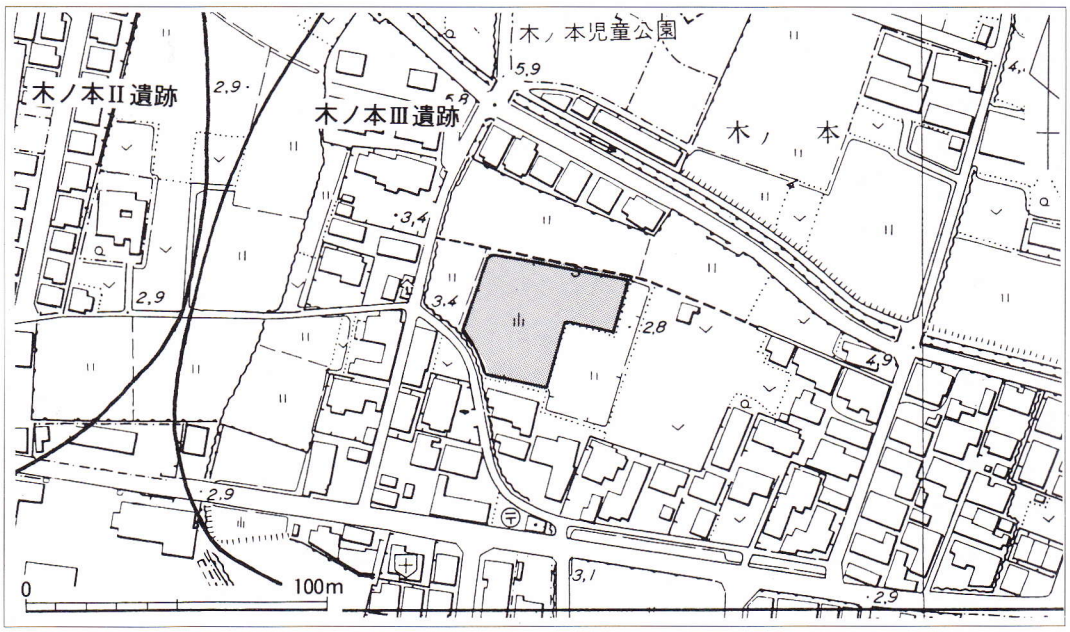
木ノ本Ⅲ遺跡は東西に連なる和泉山脈と、その南側を並行して流れる紀ノ川を中心に広がる和歌山平野が接する旧南海道に沿った低地に位置し、東西約１km、南北約400mを範囲とする遺物散布地である。また、当遺跡には和歌山県下では珍しい平地に造られた木ノ本古墳群があり、有田市の椒古墳と共に砂地に築かれた数少ない古墳が東から釜山・車駕之古址・茶臼山の各古墳が３基並んでいる。

当遺跡を含む紀ノ川北岸は遺跡が絶え間なく連なる地域で、加太・友ヶ島遺跡、加太廃寺跡、西庄遺跡、大谷古墳、楠見遺跡、晒山古墳群など各時代にわたる遺跡が存在し、歴史上の重要な地域となっている。しかし近年の急速な土地開発によって壊された遺跡も多く、その対応が望まれて久しい。

調 査 内 容

木ノ本Ⅲ遺跡については釜山古墳が過去に地元の人によって発掘され、また1986年に同志社大学と和歌山市教育委員会が車駕之古址古墳の北側で発掘調査を行い貴重な成果を収めている。

今回の調査は住宅建設に伴うもので、茶臼山古墳の南100mに位置する水田地帯の一画約600m²について発掘調査を行った。



調査対象地の位置

調査手順としては、排土の関係上まず調査区の北半に東西44m南北８m（第１区）の区画を設け、次いで南半に区画を設けることとした。なお重機による耕土の除去作業中に湧水が少なくないことが予想されたので、第１区の南に排水用の溝を設けた。第１区を調査している途中で南半西側にトレンチ（第２トレンチ）を設け掘り下げた。第１区の調査終了後、南側に東西９m南北21m（後に西側を拡張）の第２区を設け、最後に排水溝としていた部分にトレンチを設けた。また調査方法の試みとして一ヵ所にトレンチ（第１トレンチ）を設け、周囲を矢板で簡易的に囲んで掘り下げてみたが、矢板の隙間からの湧水がいちじるしく調査を続けることが困難となったのでやむなく中止した。

ま と め

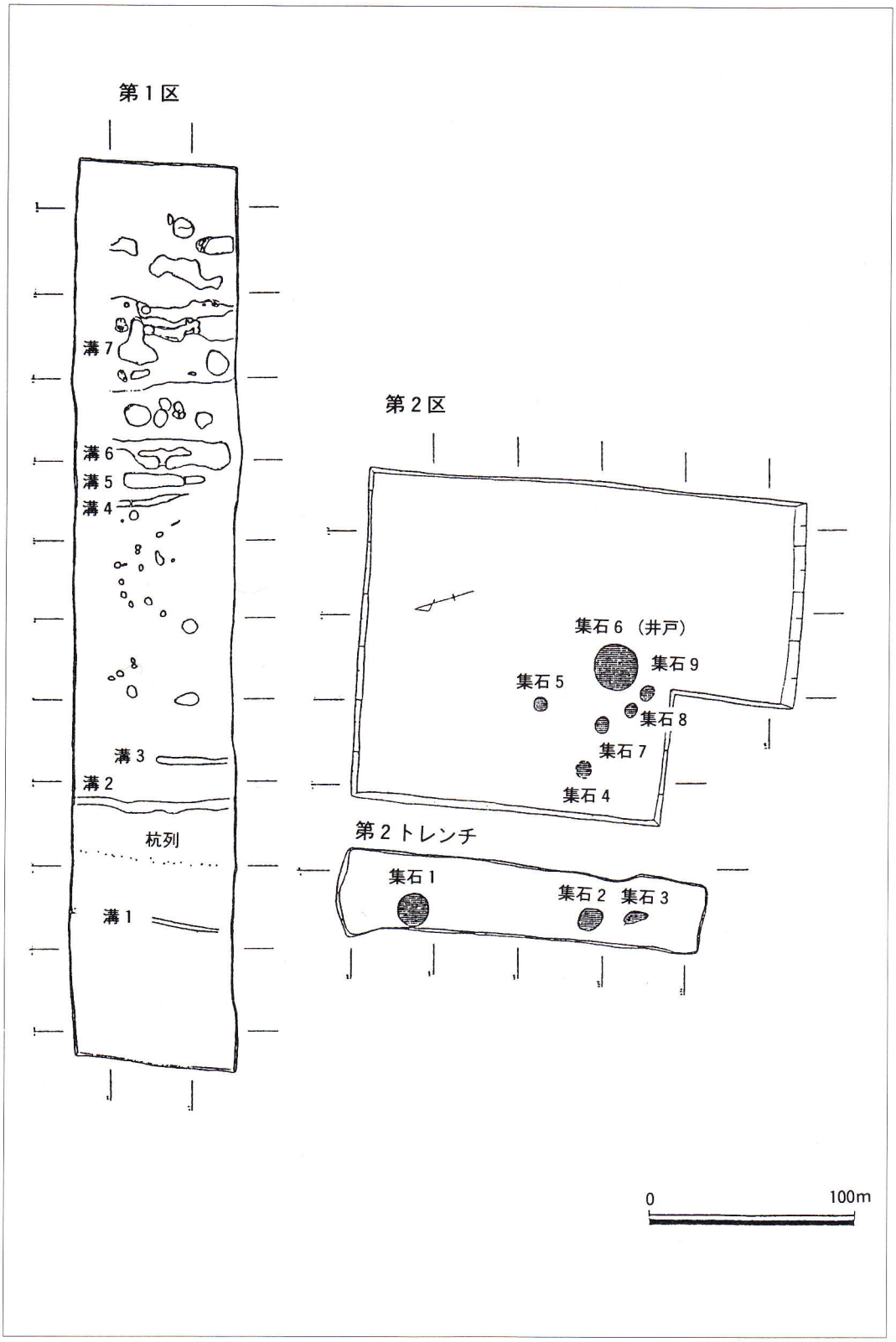
今回の調査を行うにあたって、ある程度の湧水は覚悟して臨んだわけであるが、予想以上に水の湧きが早く、１日中ポンプを動かしても追いつかないほどであった。また地質が厚い砂層であったため、掘りやすいかわりに崩れやすいというの状況下での作業であった。この様な砂地に井戸を掘っていたということは、当時の土木工事の在り方をあらためて考えさせられたと同時に、水系が現代と違った流れをしていた可能性を示しており、地形変化を考えるうえで１つの資料となるであろう。

近世の遺構としてはその大部分がすでに削平を受け、調査第１区で確認されただけであった。南北方向に延びる杭列と数条の溝の他に土坑とピット群が点在していたが、詳細は不明である。

中世の遺構としては10基余りの集石が調査区の南西部にかたまって存在していた。いずれも人頭大の砂岩を用いており、混入する遺物から16世紀に作られたと考えられる。また１つの土器の破片がいくつかの集石に分散していたことから同時期に作られた可能性が高い。集石の上部構造については全くわからない。

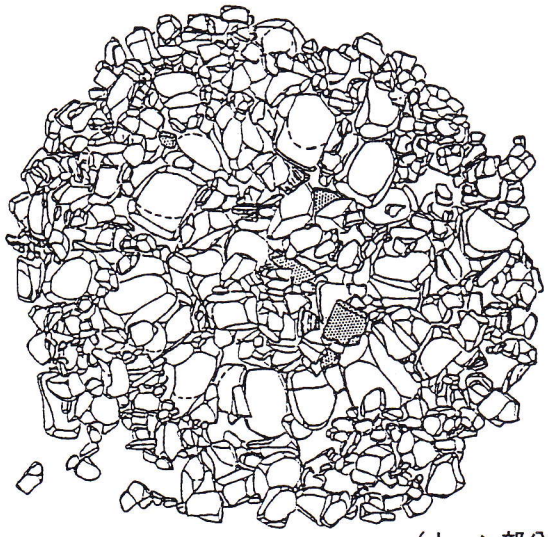
廃絶後に集石に転用されていた井戸（裏表紙写真）は直径約75cmを測り、下部構造に２個体以上の桶を重ねて用い、その上にほぼ30×50cm大の砂岩を５段積み重ねている。裏込めに混ざっていた瓦器等からその構築は14世紀代以降であろう。

出土遺物で完形となったのは丸瓦の１点だけで、あとは部分的に復元されたのみである。量的には瓦片がその大部分を占め、とくに集石群から大型で厚みのある瓦片を多く出しており、周辺に寺院級の建物があった可能性を示している。また行基式の瓦を含むなど瓦の中でも時代幅があり、今後の研究課題の１つとできよう。周辺地域の調査及び関係資料の増加が待たれるところである。（益田雅司）


第１区
溝７
溝６
溝５
溝４
溝３
溝２
杭列
溝１
第２区
集石６（井戸）
集石９
集石５
集石８
集石７
集石４
第２トレンチ
集石１
集石２
集石３
0
100m

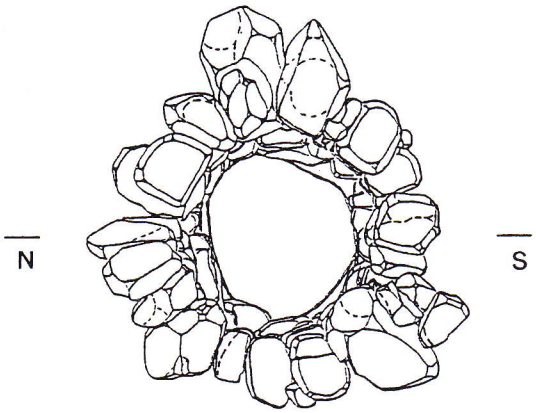
調査地区配置図

〈平面図〉

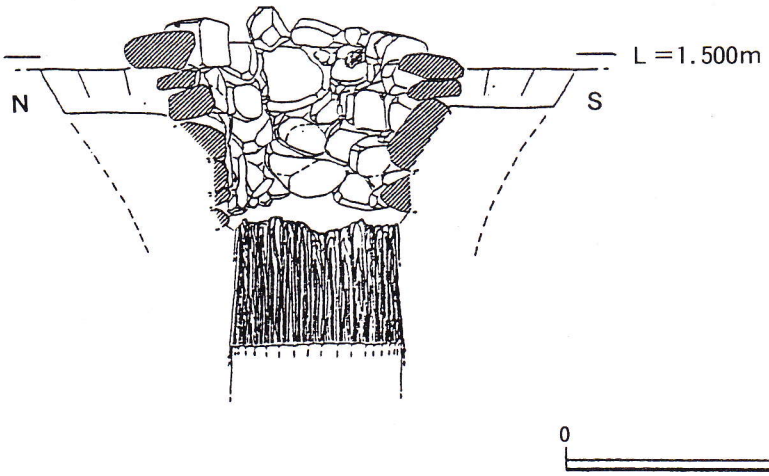


（トーン部分は瓦等混入遺物）

〈平面図〉



〈断面図〉



集 石 6 （井戸）

6. 史跡和歌山城（しせきわかやまじょう） 第９次調査

調 査 地　和歌山市一番丁３

調査面積　47㎡

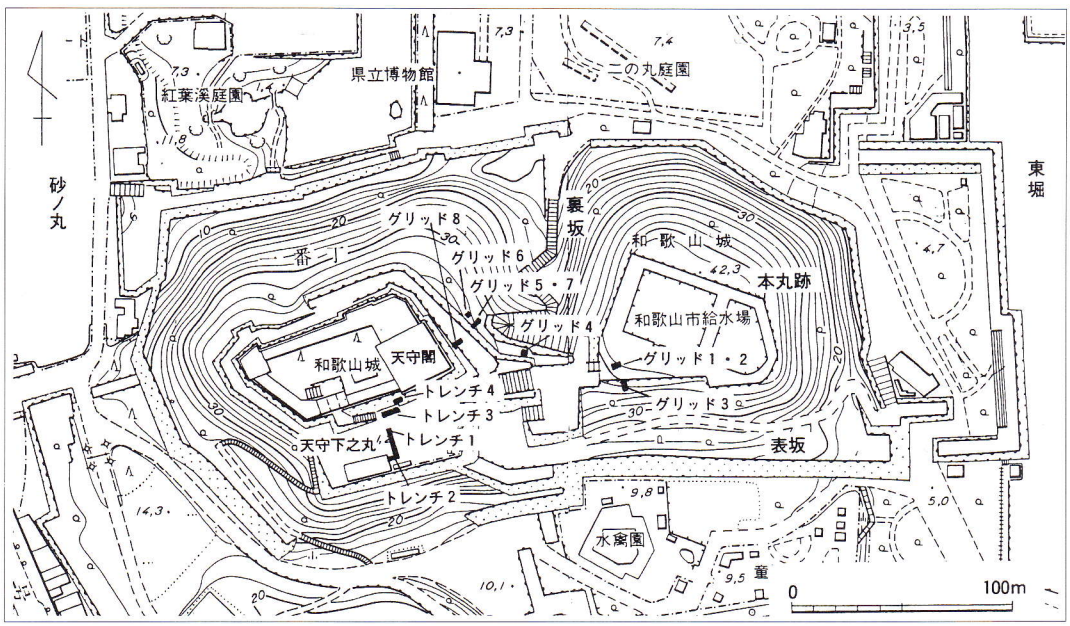
位置と環境

和歌山市の中心部に位置する平山城である和歌山城は、天正13（1585）年に羽柴秀吉のもとに縄張りがなされ、本丸・二の丸が築城されたことに始まる。その翌年には、領主羽柴秀長の城代として桑山重晴が３万石を領して入城した。その後、慶長５（1600）年に浅野幸長が37万６千石で入城、さらに元和５（1619）年には徳川家康の第10子であった徳川頼宣が55万５千石を領して駿河から転封された。

今回、和歌山城天守閣と本丸の周辺地域において、電柱の移設及びケーブル埋設工事が実施されるに伴い、事前の発掘調査を行った。

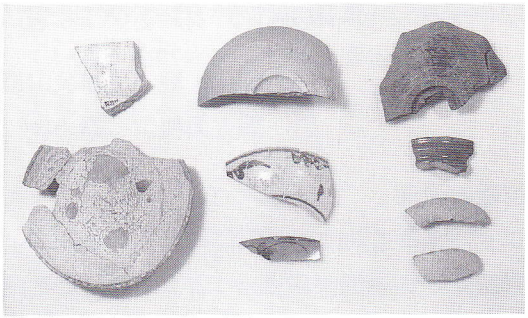
調 査 内 容

10個所の調査地のなかで本丸南側のグリッド３、裏坂のグリッド４、天守閣東側のグリッド５・７において築城当初の江戸時代の石垣裾部を検出した。本丸南側の石垣では、比較的小振りな緑色片岩を野面積みするのに対して、天守閣や裏坂近くの石垣は大振りで直方体に近い片岩を横積みするという相違点はみられるが、ともに岩盤を水平よりも傾斜させて整形した上に石垣基底石を据え置き安定させるという構築方法では共通していた。グリッド３の石垣外側の堆積下層からは、ハマグリ・シジミ・カキ・サザエ等の貝殻とともに胎土目の唐津焼皿や天目茶碗・瓶のほか志野の坏、中国製染付皿、中国製白磁皿、土師質皿、巴文軒

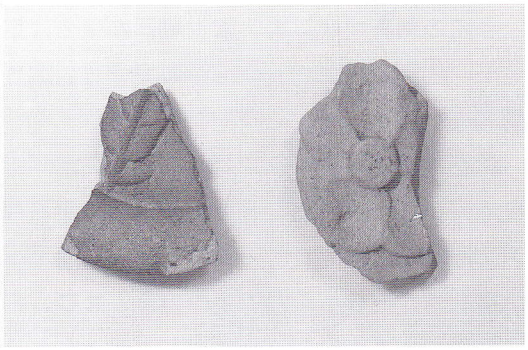


調査地（トレンチ、グリッド）の位置

グリッド３　本丸石垣裾部



グリッド３　出土土器（唐津焼皿・瓶、中国製染付皿、土師質皿）



鷹羽文軒丸瓦（左）と桔梗文軒丸瓦（右）

丸瓦、唐草文軒平瓦がまとまって出土した。グリッド６からは、鷹羽文軒丸瓦片が出土した。

天守下之丸に設定したトレンチ１～４のうち、トレンチ１・２では戦災に関係する焼瓦の堆積層や瓦溜が確認された。トレンチ３は後世の配管による攪乱があるものの江戸時代の堆積が残されており、丹波焼すり鉢（17世紀中葉～18世紀初頭）、伊万里の仏飯器のほか最下層より桔梗文軒丸瓦が出土した。また、注意される遺物として瓦器椀（13世紀後半から14世紀前半）が数点出土している。

ま と め

調査により石垣裾部が検出されたことにより、緑色片岩を使用した築城当初とみられる石垣の構築方法の一端を知ることができた。また、使用石材の形態差は、時期差ではなくその背後の建物の性格の差に起因する可能性も考えられた。桔梗文と鷹羽文の軒丸瓦は、それぞれが初代城主の桑山氏と次の浅野氏（違鷹羽文）の家紋であるとともに、城主の変動と城の構造変化との関係においても重要な遺物である。また、グリッド３下層出土の土器群は、出土状況と組成よりみて一括性の高い遺物であり、概ね1590年頃～1610年代後半の年代が想定される。大坂城の調査成果等を参考にすると1610年代に主体があると判断される。つまり、浅野氏の時代に使用された土器群が廃棄されたものと考えられる。同じ堆積土から出土した貝殻類は、当時の城郭内での食生活を知る手掛かりとなる。（前田敬彦）

7．木ノ本（きのもと）Ⅲ遺跡 第４次調査

調 査 地　和歌山市木ノ本699
調査面積　23.5m²

位置と環境

木ノ本Ⅲ遺跡は紀ノ川河口に広がる和歌山平野の北岸、和泉山脈の山麓際に存在する東西約４km、南北約400mの広範囲にわたる遺物散布地として知られている。また当遺跡内には標高約４mの砂地に築かれた３基の古墳からなる木ノ本古墳群があり、和歌山平野の歴史を知る上で注目すべき地域である。

今回の調査地は、木ノ本古墳群の中では東端に位置する釜山古墳の北西部に隣接する畑地で、住宅建設に先立つ遺跡の実態確認調査として行った。

調 査 内 容

調査方法はグリッド（１区）とトレンチ（２区、３区）による部分的なものであったが、現地表から１mのところで東西方向の集石列や２基の集石群が検出された。

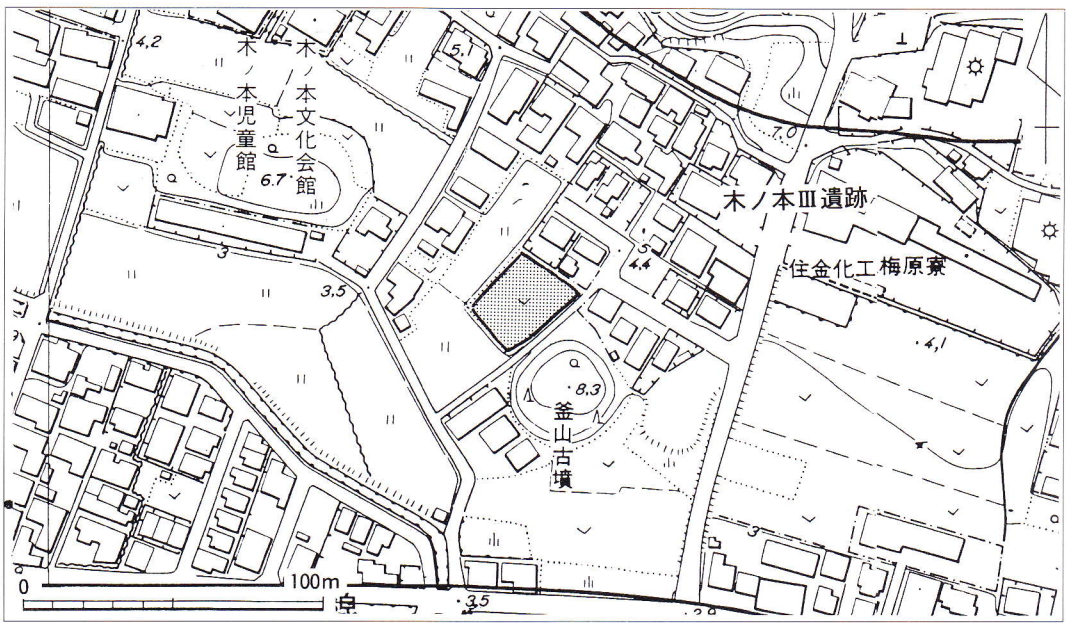
(1) 遺　　構

集石列は約３mの幅で東西方向に延び、南北側に握り拳大の割り石が密に並び、北西側にはやや大きめの割り石が少し下がったところに並んでいた。

集石群は握り拳大の割り石をそれぞれ方形・楕円形に集めた状態になっていた。

(2) 出 土 遺 物

黄灰色系砂質土から多量の埴輪片や土器片などが出土した。いずれも破片であり、時期



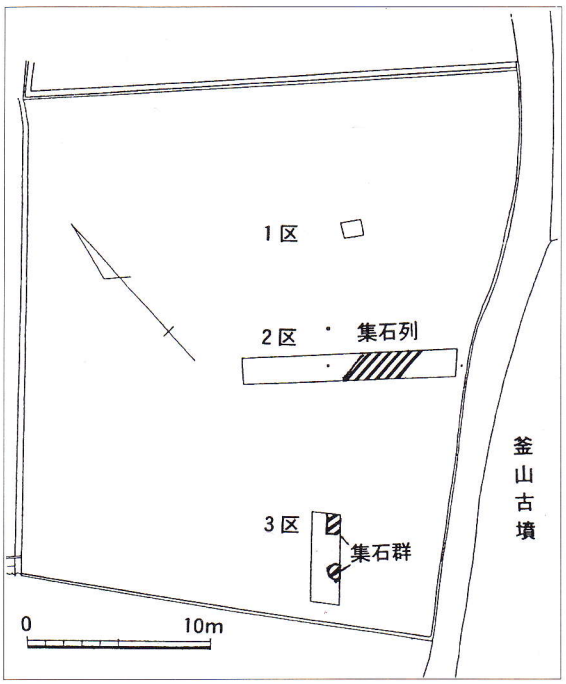
調査対象地の位置

差の幅も大きい。埴輪は円筒埴輪片が大部分であるが、少量ながら朝顔形や衣笠形埴輪、また淡輪技法を用いた須恵質の埴輪片も出土している。土器片としては土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、白磁、陶器、土師質土器、須恵質土器、瓦質土器、染付などが出土している。その他に瓦片、土錘、砥石なども出土している。

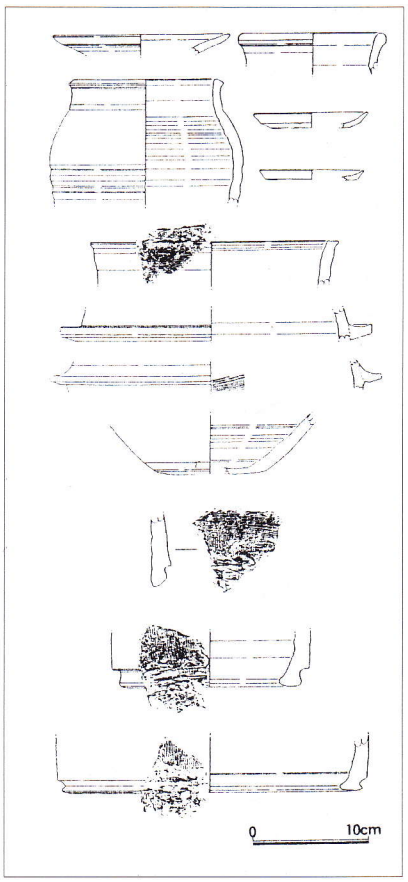
ま と め

釜山古墳は直径約40m、高さ約７mの円墳で、墳丘の東南部には幅約４mの周濠の痕跡が一部残っている。今回はその反対側にあたる場所であったために古墳の周濠及び墳丘裾の確認が期待されたが、残念ながらはっきりと確認するには至らなかった。現在古墳の北西部は墳丘を削ったようにして道が造られているが、早くから墳丘直下まで人の手が及んでいたことが推察される。

以上のように限られた範囲での調査ということで、不明瞭な部分ばかりが残ってしまった。釜山古墳は明治31年に調査されてはいるが、全容を知るには至っていない。今後の課題としては、釜山古墳だけでなくて木ノ本古墳群全体を含めた視野で見て行く必要があろう。特に周辺地域については開発による環境変化が著しく、実態の解明がむずかしくなりつつあるのが現状であり、その対策についても急を要している。（益田雅司）



調査地区配置図



出土遺物

8. 園部（そのべ）・六十谷（むそた）地区 遺跡確認調査

調 査 地　　和歌山市六十谷中尾他

調査面積　　53m²（踏査　約200,000m²）

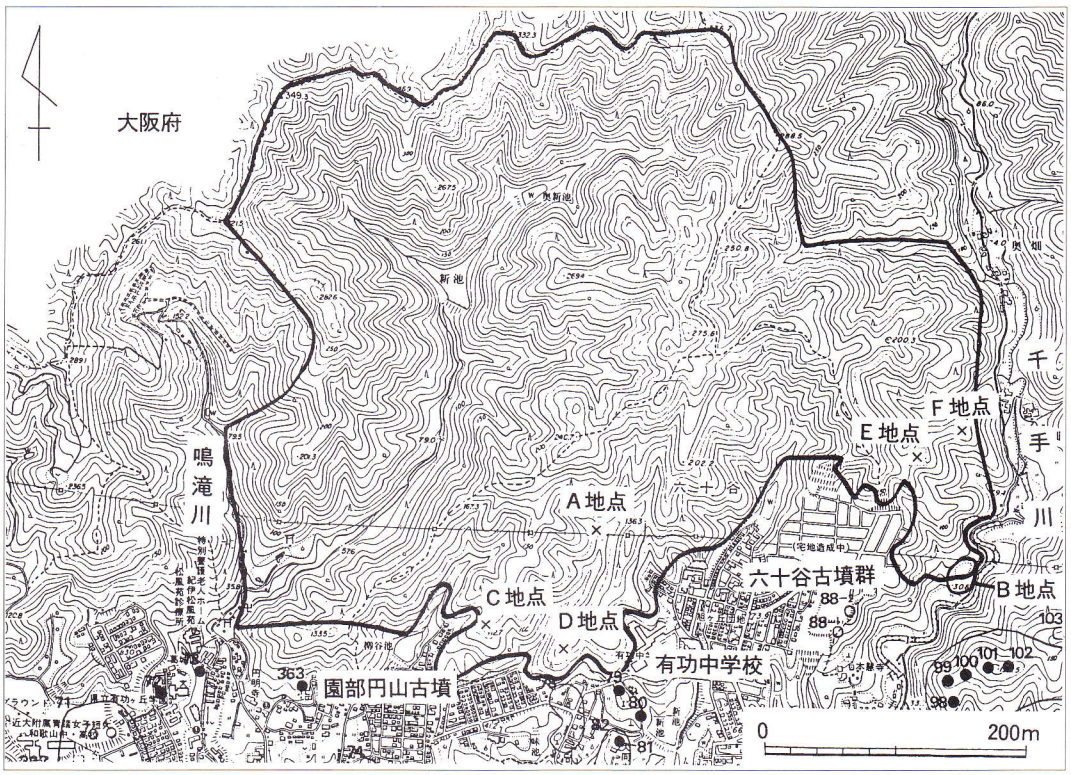
位置と環境

この地域では、和泉山脈から南へ派生する丘陵の先端部付近や丘陵裾部と紀ノ川との間の緩斜面において古墳時代中期から後期の古墳（群）が築かれている。これらの古墳の背後に位置する和歌山市六十谷及び園部地区の丘陵部において開発計画が予定されたため、踏査による遺跡確認調査と試掘調査を実施した。

調査内容

調査対象地は広範囲にわたったが、周辺地での遺跡の立地よりみて丘陵先端部付近の南斜面に遺跡が形成されることが多いために全域を踏査対象地とするとともに鳴滝川東側の斜面、和歌山市立有功中学校裏山付近及び千手川西側の斜面を重点区域とし、踏査・試掘を行った。鳴滝川東側の斜面部においては、植林や白山神社建設に伴う地形の改変が著しく遺構・遺物とみられるものは確認できなかった。

有功中学校裏山付近では、尾根線上の微地形によりC・D地点において試掘調査を実施したが、いずれも表土直下で岩盤が露出し、明確な遺構は検出されなかった。ただし、谷



踏査対象地と試掘地点

調査対象地遠景（手前の丘陵部）

合いのＡ地点において、長さ約145cm、幅約40cm、厚さ約20cmの緑色片岩の板材が橋として利用されているのが発見された。

千手川西側においても丘陵部の試掘地点はすぐ岩盤が露出し、遺構は検出されなかったが千手川沿いのＢ地点の畑・水田においてはチャート片、サヌカイト製石槍片、須恵器、土師器、近世陶器が採集された。

ま と め

Ａ地点の緑色片岩は、紀ノ川南岸から持ちこまれたものであり、その形状・材質よりみて古墳時代の石室用材であったものとみられる。周辺地には古墳が存在した可能性が高い。Ｂ地点は、弥生時代から江戸時代までの範囲で遺物がみられ複合遺跡と判断される。（前田敬彦）

Ａ地点発見の緑色片岩板石

9. 奥山田遺跡（おくやまだ） 第３次調査

調 査 地　和歌山市下三毛774他

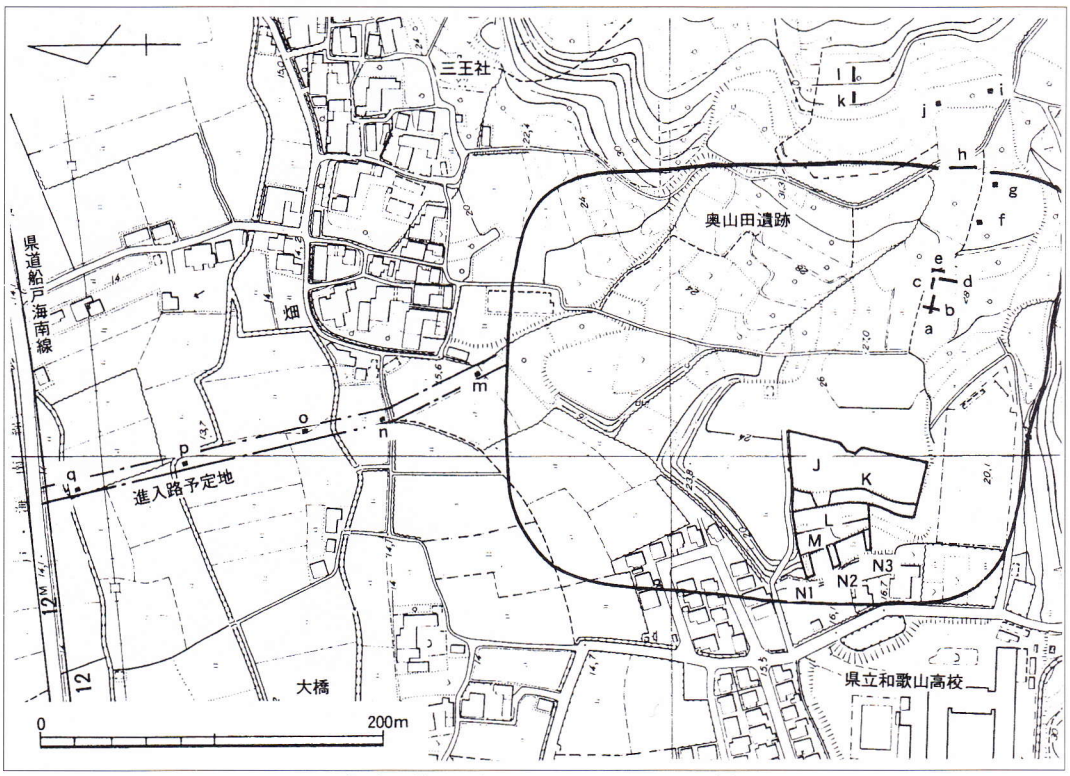
調査面積　3,000m²

位置と環境

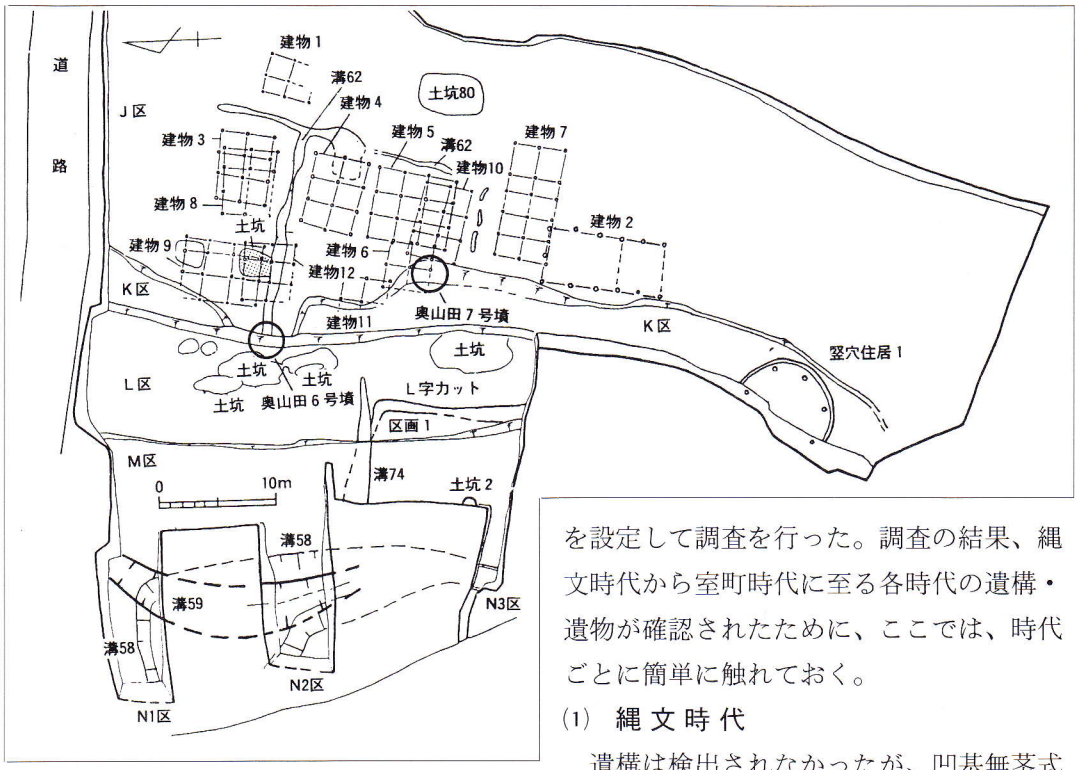
奥山田遺跡は、市内東部の紀ノ川南岸に位置する標高20～30mの台地（低丘陵）上に立地している。遺跡内の開発計画に対処するために、昭和45（1980）年度より、和歌山県教育委員会、和歌山市教育委員会により４次にわたる発掘調査・確認調査が実施されている。今回、遺跡内において宅地開発計画が起こったために、事前の発掘調査を実施した。なお、現地説明会等では、県教育委員会による調査も含めて第５次調査として扱ったが、今後、和歌山市関係で行った調査次数で統一するために第３次調査として報告する。

調 査 内 容

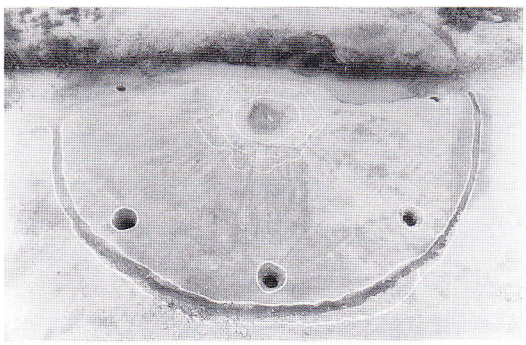
調査対象地は、既往の調査と踏査結果により大きく３個所に分けられる。ひとつは、北約300mに走る県道船戸海南線からの侵入路部分であり、計画路線上の水田・畑に５個所のトレンチ（m～q トレンチ）を設定して調査を行った。いまひとつは、遺跡中心部の立地する丘陵の南半の旧果樹園・水田でＪ～Ｎ区として面的な調査を実施した。最後のひとつは、Ｊ区から南東へ100～200mの果樹園・水田に12個所（ａ～ｌトレンチ）のトレンチ



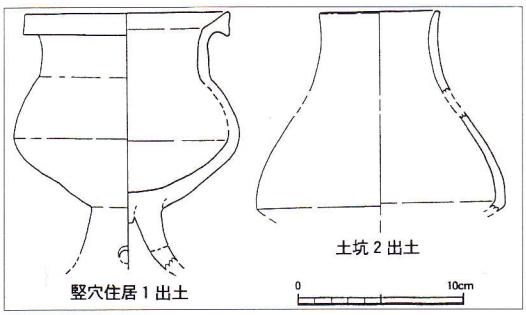
調査地の位置（ａ～ｑはトレンチ調査）



主要遺構配置図（J～N３区）



弥生時代 竪穴住居１



弥生土器実測図

を設定して調査を行った。調査の結果、縄文時代から室町時代に至る各時代の遺構・遺物が確認されたために、ここでは、時代ごとに簡単に触れておく。

(1) 縄文時代

遺構は検出されなかったが、凹基無茎式石鏃（サヌカイト製・チャート製・石英製）とサヌカイトのチップが出土した。狩り場であっただけでなく、生活の場でもあったとみられる。

(2) 弥生時代

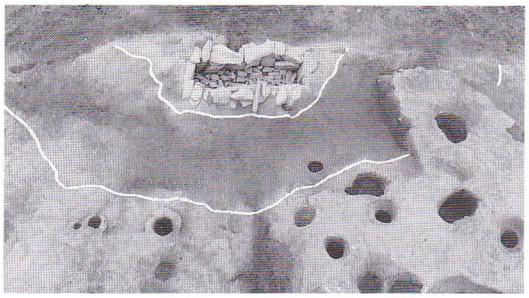
K区において円形竪穴式住居、M区で土坑、N１～N２区において濠状遺構（溝59）が検出された。

竪穴住居１は、西側３分の１が消滅しているが直径8.6mで、５本の柱跡、中央に炉堤をもつ炉が確認された。本来は７本柱と復元された。

濠状遺構は、本来丘陵裾部を取り巻いていたものとみられる。土坑出土の土器も含めて、弥生時代中期末から後期前半頃の時期が想定される。

(3) 古墳時代

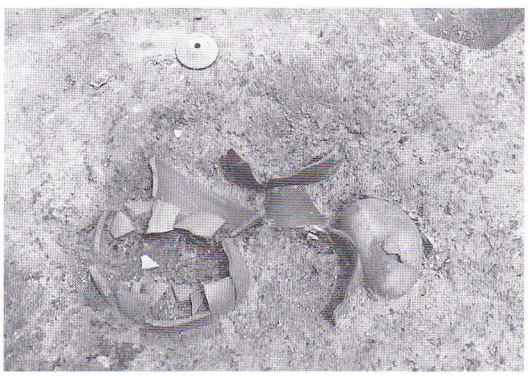
後期古墳３基（奥山田６・７号墳はJ～



奥山田６号墳（竪穴式石室と周溝）

奥山田６号墳 石室内の須恵器（短頸壺）

奥山田８号墳（横穴式石室）



祭祀土坑１（滑石製紡錘車と須恵器）

K区、８号墳はａ・ｂトレンチ）と須恵器がまとまって出土した土坑１基が検出された。

奥山田６号墳は、直径約９ｍの周溝の一部と小竪穴式石室（内法で長さ1.6m、幅約0.5m）が遺存していたもので、石室内の床面敷石上には完形の須恵器短頸壷が副葬されていた。位置と規模よりみて、この竪穴式石室は本来の主体部ではなく、副次的な埋葬施設とみられる。石室内と周溝出土の須恵器よりみて６世紀後半頃の時期と推定される。

奥山田７号墳は、６号墳の南約20mで検出されたもので、周溝のみが遺存していた。周溝の復元直径は10～15mを測る。

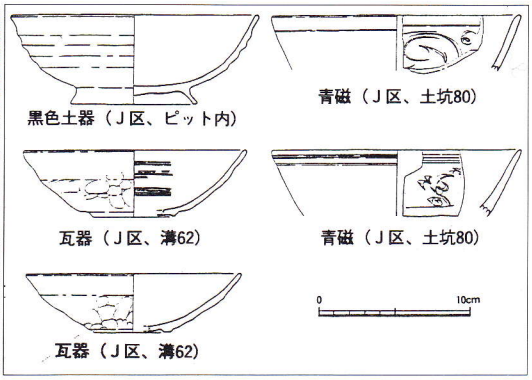
奥山田８号墳は、胴張りプランをもつ無袖式の横穴式石室である。床面には敷石の一部が残されていた。出土した須恵器よりみて７世紀代の築造とみられた。

土坑１は、６号墳の東約６ｍで検出された長径約50cm、短径約40cm、深さ10～15cmの土坑であり、土坑内より須恵器（瑞・壷・高坏）、土坑肩部より滑石製紡錘車が出土した。須恵器はそれぞれ横にして置かれたものとみられた。須恵器には時期幅がみられるが、最終的には６世紀前半に埋められたものである。近接して同時期の古墳がみられず、この土坑の機能は判明しないが、祭祀的な性格をもつものと判断される。

(4) 平安時代

Ｊ区において、中世の掘立柱建物と重なるようにして掘立柱建物（掘立柱建物２）が検出された。２間×５間の建物と推定されるが、南側の梁行２間分の柱穴は他の柱穴より規模が小さく別構造であったかもし

中世の掘立柱建物（Ｊ区中央部付近）



出土遺物（Ｊ区）

れない。柱穴出土の黒色土器・土師器（多段ヨコナデ技法をもつ椀）よりみて10世紀代の年代が考えられる。

また、Ｌ～Ｍ区では斜面をカットし平坦面をつくった段差と溝74により区画された地区が確認された。区画内は削平が著しく柱穴等は検出されなかった。

(5) 鎌倉時代

Ｊ区を中心に12～13世紀の掘立柱建物が11棟と溝・土坑が多数検出された。また主な包含層もまた、この時期の遺物を含むものであった。

遺物の整理が完了していないため厳密には言えないが、遺構の時期は切り合い関係や遺物よりみて概ね３期にわけられるようである。１期は、12世紀後半から13世紀前半頃で区画溝（溝62）より古い掘立柱建物（掘立柱建物12）が存在する。掘立柱建物がまだ、まばらに存在していたものとみられる。２期は、13世紀前半～中葉頃で、区画溝を伴った掘立柱建物４棟（掘立柱建物３、４、５、７）が整然として配置をとっていたとみられる。３期は、13世紀中葉～後半頃で掘立柱建物が減少し、土坑が多数掘削される。

丘陵裾部に、弥生時代濠と重なるように中世の大溝（溝58）が掘削される。Ｎ３区では不明確であるが、Ｎ１・Ｎ２区での屈曲の様子よりみて、丘陵裾部の西側に展開した集落の区画溝と推定される。

注意される遺物としては、越州窯青磁２点と周辺で産出する滑石製温石や石鍋の未製品が挙げられる。

ま と め

以上のように本遺跡は、縄文時代以降の良好な複合遺跡であることが判明した。時代により生活域であったり、墓域であったり目的は異なるが、この低丘陵が頻繁に利用されたことがわかる。最も遺構・遺物の密度が高かったのは中世期であり、青磁片も多数出土している。整然と並んだ建物の主については鍛冶炉等も検出された周辺の調査成果も含めて位置づける必要がある。

（前田敬彦）

10. 有功（いさお）地区 遺跡確認調査

調 査 地　和歌山市六十谷880他

調査面積　100m²

位置と環境

和歌山平野を東西に流れる紀ノ川の北岸部は、その流れに沿って帯状に遺跡が連なって存在しており、本調査地の周辺も大同寺古墳や六十谷古墳・六十谷遺跡等が近接している。また中世に於て強大な勢力を持っていた南叡山大同寺にも隣接していることから、未周知の埋蔵文化財の有無を確認するための調査を行った。

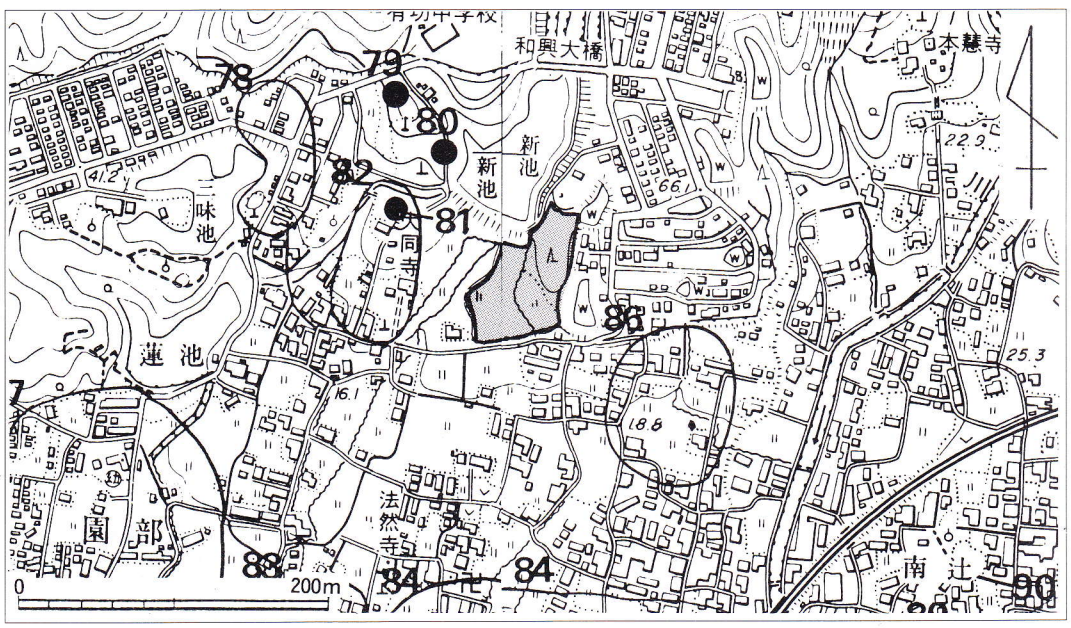
調 査 内 容

調査地の現状は和泉山脈から南に派生した支丘陵の山腹を利用して何段にも水田が営まれ、その比高差は約20mである。

調査方法は各水田に２～３ヶ所のグリッド（２×２m）を設定して掘り下げた。便宜上水田単位にＡ～Ｋ区とし、数字で区別した。

各グリッド共大部分が墾田の際に盛土をしており、盛土の中に土器片等遺物が含まれているところもあった。また近接したグリッドであっても盛土の厚さに差がみられ、もともと起伏の大きな地形であったようである。

遺構としてはＢ３区・Ｃ２区・Ｆ１区・Ｊ１区で溝状の落込みを検出したが、いずれも人為的なものとは考え難い。Ｆ１区については下層で青灰色粘土層が厚く堆積しており、溜池状の地形をしていた可能性が高い。またＤ２区で焼土や炭に混じって瓦等の遺物が大



調査対象地の位置

量に出土した。特に軟質の土師器甕の出土が目立ち、底部に一孔をあけたものや胴部に「京」の文字を刻んだものが見られた。

ま と め

今回は確認調査ということで調査面積も少なく、その全容を明かにするところまではいかなかったがおおよそ次のことがわかった。

まず人間が生活を営んでいた明確な痕跡は確認できなかった。近世以降に墾田のために盛土をして整地がなされたようである。

D２区で検出した遺物群についても同じころに一括投棄されたと考えられる。出土遺物は寺院関係のものと思える内容が多く、隣接する大同寺と何らかの関係があるものであろう。

（益田雅司）

D２区　瓦溜状遺構

11. 鳴神(なるかみ)Ⅳ遺跡 発掘調査

調 査 地　和歌山市鳴神986－１他

調査面積　40m²

位置と環境

鳴神Ⅳ遺跡は、岩橋千塚古墳群の一角である花山古墳群の西部に位置する古墳時代を中心とする遺跡である。鳴神Ⅳ・Ⅴ遺跡については、昭和52年度から54年度に一般国道24号バイパス工事に伴い、和歌山県教育委員会により発掘調査が実施され、古墳時代の溝、竪穴式住居、掘立柱建物などが検出されている。

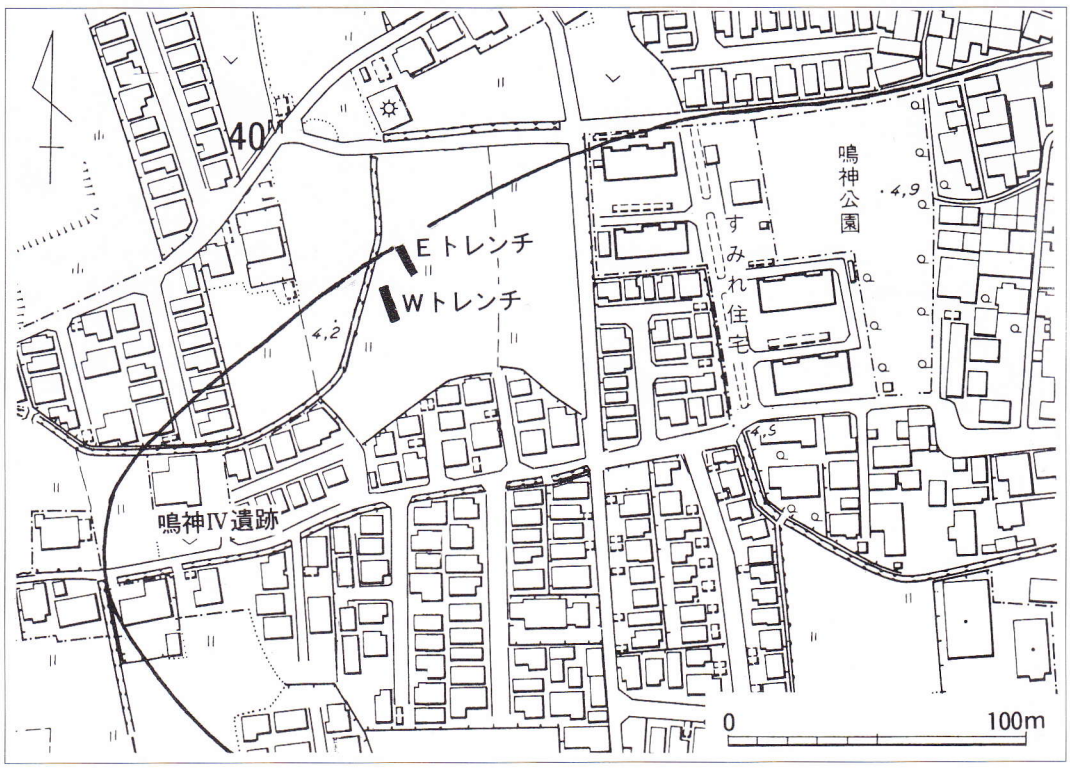
今回、遺跡内における宅地開発計画に対処するために発掘調査を実施した。

調 査 内 容

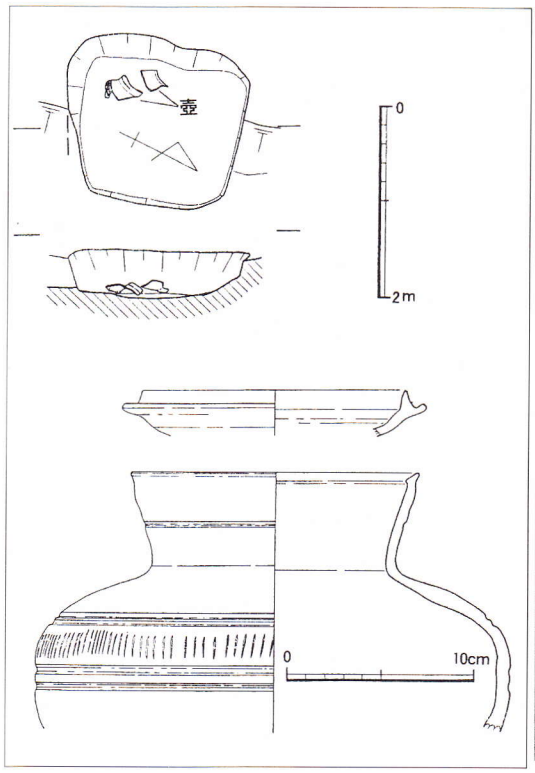
調査対象地に２ケ所のトレンチ（西側をWトレンチ、東側をＥトレンチと呼称）を設定し、調査を実施した。

Wトレンチは幅２ｍ、長さ11mのトレンチで、表土から50cmまでは、水田耕作に関係する土層で、それ以下の表土下１ｍまでに古墳時代の包含層である灰褐色系砂質土が堆積する。古墳時代包含層の下面に、幅約９ｍ、深さ約0.3mを測る浅い溝状遺構（溝１）や土坑２基（土坑１、土坑２）が形成される。

溝１からは須恵器・土師器が出土し、土坑１からは竈とみられる破片が、また、土坑２



調査地の位置



土坑４と出土須恵器（坏身・壺）

調査風景（Wトレンチ、溝１）

からは須恵器甕が出土した。

Eトレンチは幅２m、長さ９mのトレンチで、Wトレンチと同様に、表土下50cmまでは水田耕作に関係する土層であり、その下に厚さ約30cmの包含層が形成される。包含層下面には、溝状遺構２基（溝２、溝３）、土坑２基（土坑３、土坑４）が形成される。

土坑３と土坑４は、それぞれ隅丸長方形、方形のプランをもち、堆積土中に炭層が形成され、ともに壁面上部が焼けている点で共通していた。土坑４の床面に接して須恵器壺の上半部と上層より須恵器坏身が出土した。

ま と め

今回の調査地は、鳴神Ⅳ遺跡の北辺部に位置する。古墳時代の包含層が安定してみられ、古墳時代の溝、土坑が検出されたことにより、遺跡の範囲はさらに北方へ広がるものとみられた。Wトレンチで検出された溝１とEトレンチで検出された溝３は、ともにゆるやかな傾斜をもち、埋土も共通することより連続する溝状遺構と推定される。

これらの溝状遺構の埋没が完了するのは、６世紀後半から末頃で、その直後の６世紀末から７世紀初頭にEトレンチでは炭層をもつ土坑４が形成され、Wトレンチでは溝１の肩部に土坑１が形成される。土地利用の変化がうかがわれた。（前田敬彦）

12. 鳴神(なるかみ)Ⅳ遺跡 第２次・鳴神(なるかみ)Ⅴ遺跡 第１次調査

調 査 地　和歌山市鳴神974－２地先
調査面積　400m²

位置と環境

和歌山市鳴神は紀ノ川南岸の花山丘陵西方に広がる標高４ｍの微高地に位置し、その西側には太田・黒田遺跡、東側には岩橋千塚古墳群などが近接する遺跡の分布密度が高い地域の一つである。今回の調査はそうした遺跡群の中の鳴神Ⅳ遺跡と鳴神Ⅴ遺跡にまたがって南北に走っている市道の拡幅工事に先立つものである。

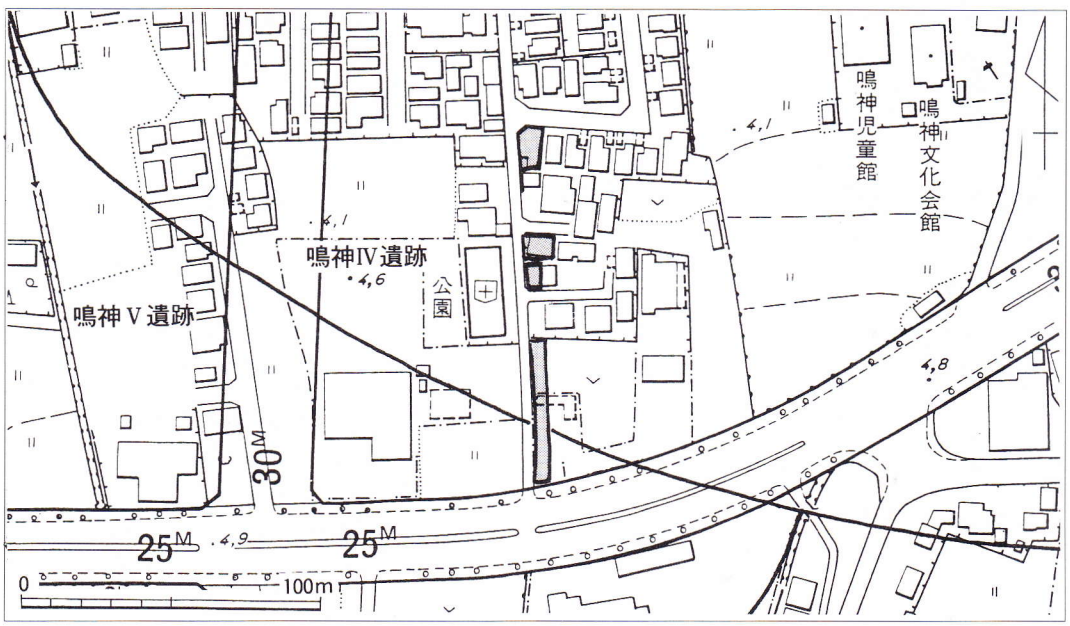
調査内容

調査は住宅が建て込むなど地形的制約を受け、６区に分けて実施した。

各区とも旧耕作土直下に遺物包含層があり、その下に純粋砂層が厚く堆積していた。場所によっては粘土層が挟まれたところもあったが、基本的には上から表土、旧耕作土、遺物包含層（褐色系砂質土）、純粋砂層（灰色系砂）の順である。表土は30cm～１ｍを測り、北側ほど厚さを増していた。

遺物包含層の厚さは20cm～１ｍと一定ではなく、旧地形が平坦でなかったことを示している。また遺物の密度も場所によって大きく違っていた。

出土遺物は全体でコンテナ約３個分で大部分が細片であった。内訳は大部分が硬質の土師器片で、皿・椀・壺・甕・高杯・土錘・製塩土器などである。他には須恵器（杯・壺・高杯・甕・提瓶・円面硯など）、黒色土器（椀）、瓦器（椀・鍋）、青磁（碗）、緑釉陶器



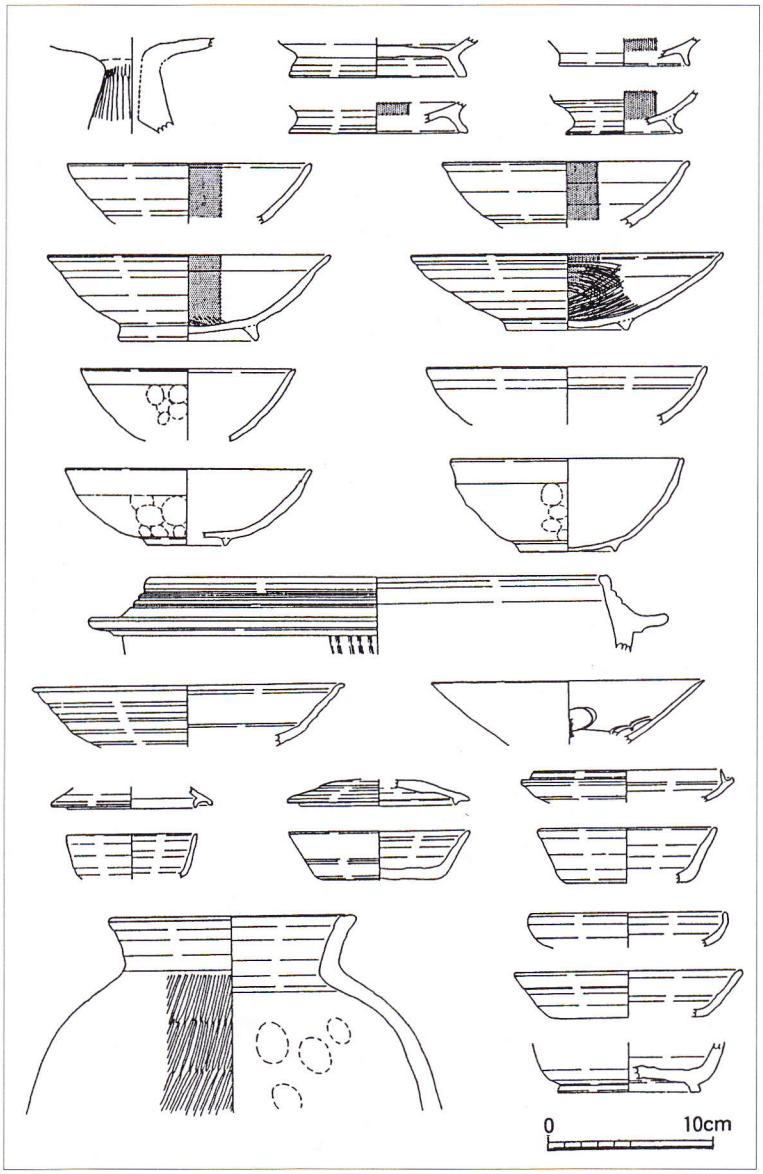
調査地の位置

（椀）、瓦（平丸）などの破片が出土している。また韓竈の破片も少なからず出土しており、周辺に生活空間が存在したことを想定できる。

ま と め

今回はごく限られた面積での調査であったため、平面的な調査が殆どできず明確な遺構を検出することができなかった。

出土した遺物については、平安時代を中心として古墳時代から近世にわたる多様な土器類が確認され、その中には研究資料として貴重なものも少なくなかった。　（益田雅司）



出土遺物

13. 大川西方遺跡（おおかわせいほう） 確認調査

調 査 地　和歌山市大川650他

調査面積　40m²

位置と環境

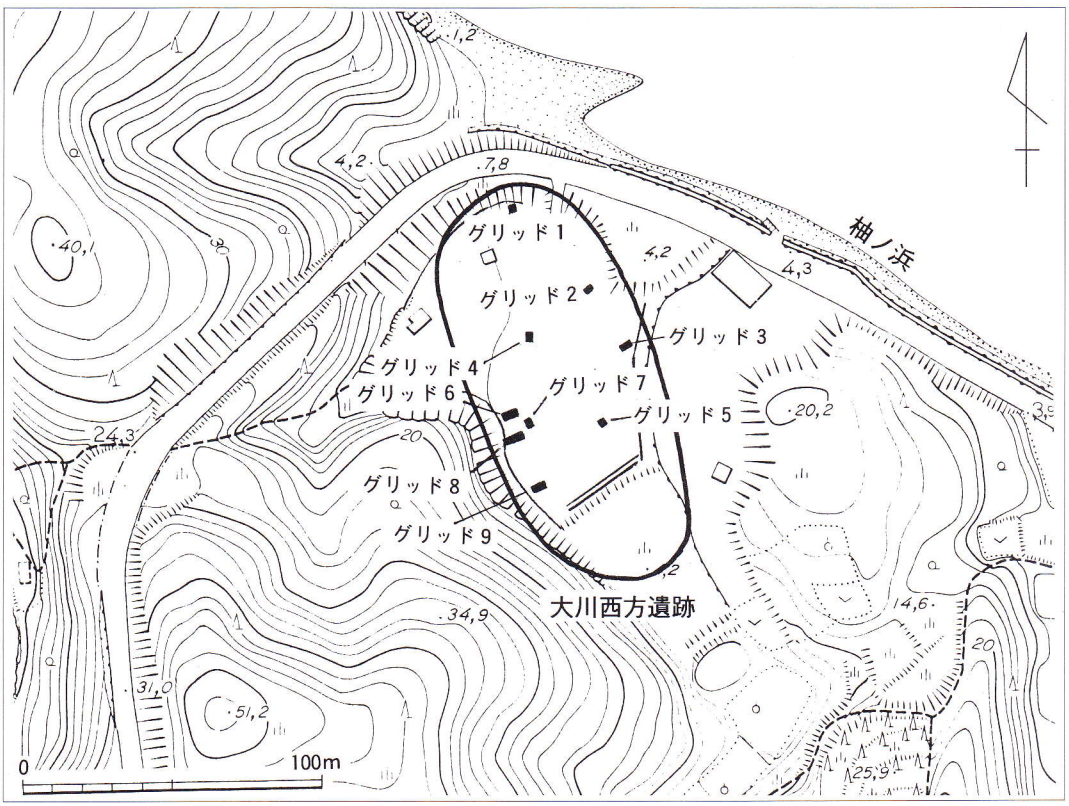
大川西方遺跡は、昭和42（1967）年度の分布調査の際に発見された遺跡であり、加太の集落の北方４kmの大阪湾を望む海岸沿いに位置する。青磁・土師器・瓦器・土錘が採集され、平安時代かそれ以降の時期の遺跡とみられている。

今回、遺跡範囲内における開発計画に対処するために遺跡の確認調査を実施した。

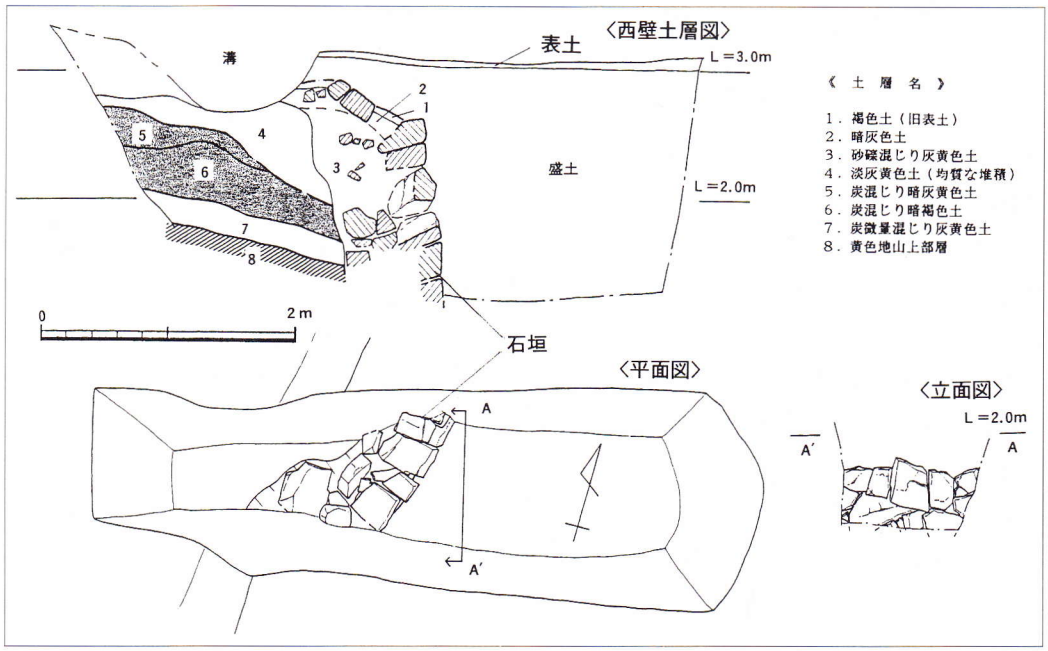
調査内容

調査対象地に９個所の調査区を設定し確認調査を行ったが、調査区の中央部においては近年の盛土が1.5～２mにも及ぶとともに表土下２m前後の標高約１mの位置に湧水面が存在し、旧耕作土以下の調査は困難な状態であった。

グリッド１によると、表土下60～80cmに旧表土がみられ、その下層約50cmの厚さで灰黄色系砂質土と黄色粘土の互層がみられた。その下、標高約1.4m前後には厚さ10cm程度の微量の炭混じりの暗灰褐色やや粘質土が堆積し、包含層のようにみえたが、遺物の出土は確認されなかった。標高１～1.4mには砂層・砂礫層が堆積し、砂層には微量の炭が含



調査地の位置



グリッド8　石　垣

まれていた。西側の道路が建設される以前には、この地点は北側の海へ突出した小丘陵の東側裾部にあたり、西から東へ緩やかに傾斜した砂地であったとみられる。

山裾に設定したグリッド６・８からは、石垣が検出された。本来同一の石垣であり北方へ続いて構築されたものとみられた。石垣は、丘陵斜面から続く岩盤と堆積土を垂直気味にカットし、一辺15～20cmほどの和泉砂岩の角石を６～７段、高さ１m以上に積み上げていた。グリッド８において、石垣構築以前の斜面堆積である５・６層には炭と脆くなった砂岩小石が含まれており、遺物の包含はみられなかったが、何らかの遺構に伴う堆積土である可能性が高い。

遺物としては、クリッド６の旧表土より江戸時代後半頃の炮烙（ほうらく）が出土したのみであった。

ま と め

グリッド６・８で検出された石垣は、丘陵裾部を取り巻くように構築されていたのは確実である。武内善信氏の幕末の和歌山藩の御台場（おだいば）と海防についての研究（注１）によると、嘉永６（1853）年のペリーの来航などの事件を契機にして、嘉永７年１月頃から15個所、ロシア船ディアナ号が大阪湾に侵入した嘉永７（1854）年９月までに30個所の御台場（砲台）が加太から有田郡宮崎までの紀北の海岸沿いに築造されたとされ、調査地周辺の柚ノ浜に海防のための御台場が築かれたのは、ディアナ号来航直後であったものと考えられている。また、御台場の構造については土俵を積み上げたものか、せいぜい石垣の上に土塁を固めた程度のものだったとされる。今回、検出された石垣は、その位置・規模・構造と若干の出土遺物からみて、幕末頃に築かれた御台場の一部であったと考えられる。（前田敬彦）

（注１）武内善信「「海防図」を読む－幕末和歌山藩の御台場と海防－」『和歌山市立博物館研究紀要』3（1988）

14. 車駕之古址古墳 第１次調査

調 査 地　和歌山市木ノ本715他

調査面積　290m²

位置と環境

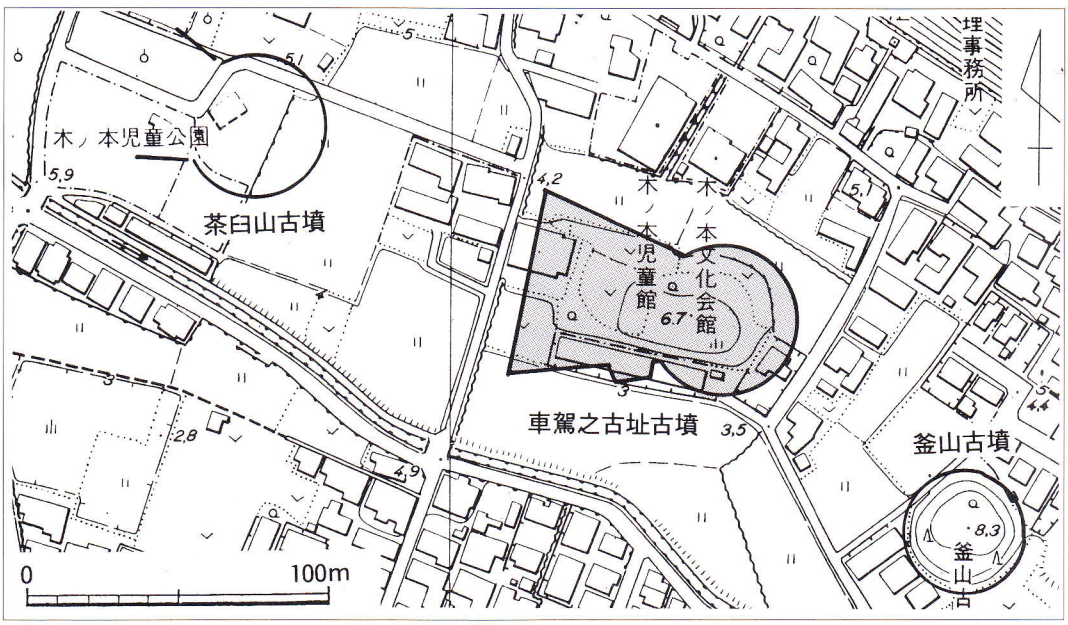
本古墳は、和歌山平野の北西部、和泉山脈の山裾部の標高３～４ｍの平野部に立地する前方後円墳である（表紙写真）。西方約150mに位置する茶臼山古墳（前方後円墳？　規模不明）と南東約100mに位置する釜山古墳（円墳　直径約40m）とともに木ノ本（釜山）古墳群を形成する。県下においても、平野に立地する屈指の中期古墳群である。

開発計画に対処するために、測量図の作成とトレンチ調査を実施した。

調 査 内 容

現況の測量図によると本古墳は、西面して築かれた前方後円墳で、全長約70m、後円部直径約38m、前方部長約35mであり、後円部の最高点で標高6.35m、前方部の最高点で6.21mである。周辺の水田面との比高は2.9～3.9mであり、墳頂部には畑作に伴う畝がみられる。また前方部端部には倉庫、墳丘南側には住宅が建設されており、後世の改変が著しいものとみられた。

12個所に設定したトレンチ調査では、後円部中央で主体部は検出されなかったものの前方部南側斜面において墳丘２段目とみられる葺石が長さ９ｍ以上にわたって遺存しているのが判明した。葺石は高さ１～1.5m、角度は20度前後で積まれており、葺石には長径10～30cmの砂岩の河原石を主体とし、若干の片岩が使用される。やや大振りな石材を縦方



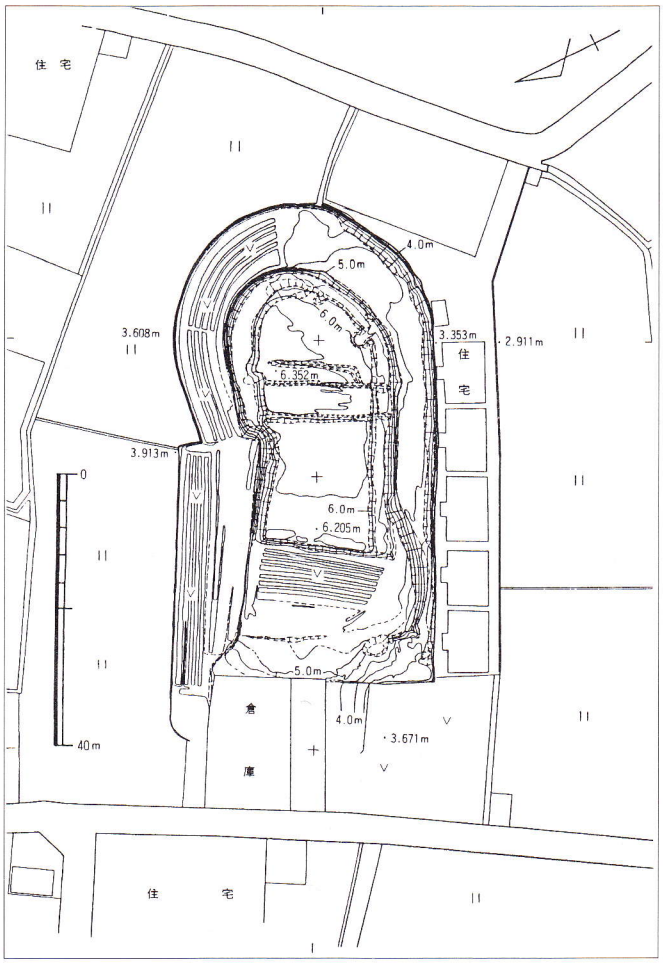
調査対象地の位置

向に並べた境界列石もみられた。現況の後円部の裾部においても和泉砂岩の石積みが見られたが、これらはウラゴメに瓦器を包含しており後世の石垣と判断された。

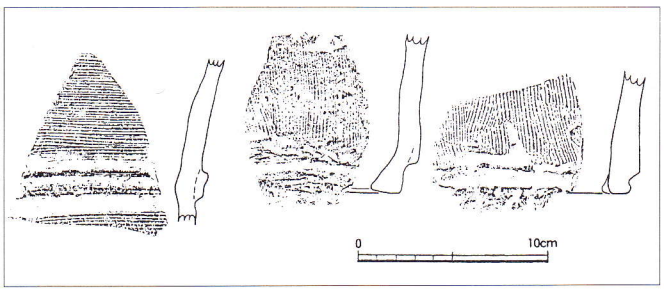
出土遺物としては、後円部の斜面堆積土からガラス小玉12点と碧玉製管玉１点が出土したほか、各トレンチより円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪（蓋）が出土した。

ま と め

調査により主体部は検出されなかったものの後円部斜面の堆積土よりガラス玉や管玉などの副葬品とみられる遺物が出土し、墳丘２段目の葺石が遺存していることも確認された。前方部２段目の葺石の方向や周辺の調査歴よりみて、本来の古墳の規模は現況よりも拡大することは確実で、全長80mにも及ぶことが推定され、また周辺の水田区画と葺石レベルとの関係よりみて盾形周濠をもつことも確実視される[注1]。埴輪は、無黒斑で須恵質焼成のものが多くみられる。円筒埴輪は、タテハケのちＣ種ヨコハケ[注2]のものが多く、底部は淡輪技法によるものである。



車駕之古址古墳測量図（数字は標高）



円筒埴輪（胴部・底部）

古墳の規模・構造・出土遺物よりみて、本古墳は５世紀中頃に築造された県下における代表的な中期古墳であることが再確認された。（前田敬彦）

（注１）『木ノ本釜山（木ノ本Ⅲ）遺跡発掘調査報告書』　和歌山市教育委員会・同志社大学考古学研究室（1989）

（注２）川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64－２（1978）

15. 木ノ本（きのもと）II遺跡 第２次調査

調 査 地　和歌山市木ノ本565他
調査面積　91m²

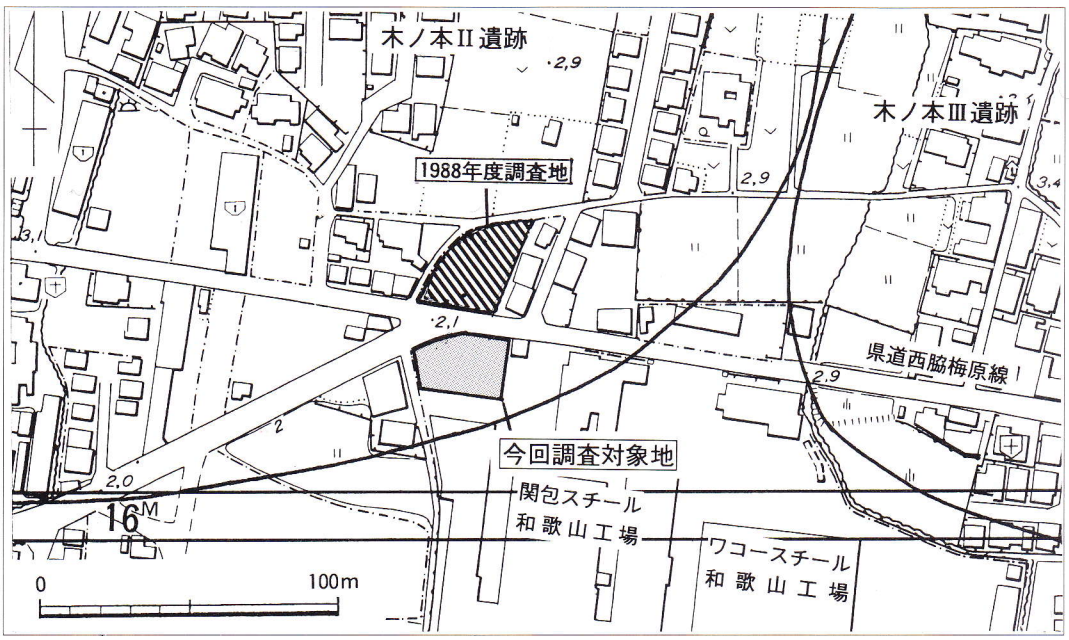
位置と環境

木ノ本II遺跡は、和歌山平野の北西部の和泉山脈のふもとに立地する遺跡である。周辺地域では、和泉山脈の傾斜変換線に沿って、西より西庄遺跡、西庄II遺跡、木ノ本Ⅰ～Ⅲ遺跡などの古代から中世の遺跡が連綿と形成されている。今回の調査地は、木ノ本II遺跡と木ノ本Ⅲ遺跡の境界付近に位置している。県道西脇梅原線を挟んで北側の土地においては、昭和63（1988）年度に調査が実施され、13～14世紀を中心とする遺物包含層が確認され、湿地状の堆積を示していた。

調 査 内 容

調査にあたっては、基礎工事により深掘される部分について13個所のグリッドを設定し、西からＧ１～Ｇ13と呼称し、機械掘削の後、旧耕作土より下層を人力掘削した。中世の包含層を挟んで上面と下面に遺構面が確認され、さらに県道寄りの調査区では下層遺構のさらに下部に沼状地形がみられた。

旧耕作土の下面には、幅10～50cm、深さ５～10cmの幅の狭い溝が多数検出された。グリッド５、８、11の西端部、グリッド12の西端部では南北方向、グリッド11、12、13の大部分では東西方向を示し、耕作土中にはガラスやプラスチック片等の近代以降の遺物が含



調査対象地の位置

まれるのに対して、これらの溝内には中世土器が主として包含される。13～14世紀の遺物包含層をベースにして形成されることよりみて、中世後期から近世期の畑作に伴う畝溝とみられた。

グリッド２、５、８の下層では、東西方向にのびる２条の溝を検出した。幅15～40cmで深さ10～30cmである。調査地の制約により相互の関係は不明であるが、位置・検出面・埋土よりみて関連性は高いものとみられる。また、グリッド13の南西部においては半径1.5～1.8m程度の土坑状の遺構を１基検出した。湧水と壁面崩壊により完掘はできなかったが、深さは50cm以上を測り土坑中央部付近では和泉砂岩の塊石が10個前後散乱していた。本来、井戸であったものが崩壊したと推定された。

以上の下層遺構からは、瓦器・土師質土器・羽釜・青磁などが出土し、13世紀～14世紀の時期に属するものとみられた。

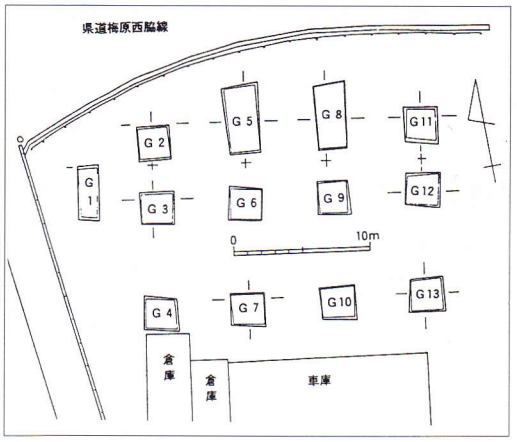
また、グリッド5の北端の最下層、沼状地形の埋土とみられる堆積土より自然木とともに縄文時代晩期末の刻み目突帯をもつ深鉢が出土した。

ま と め

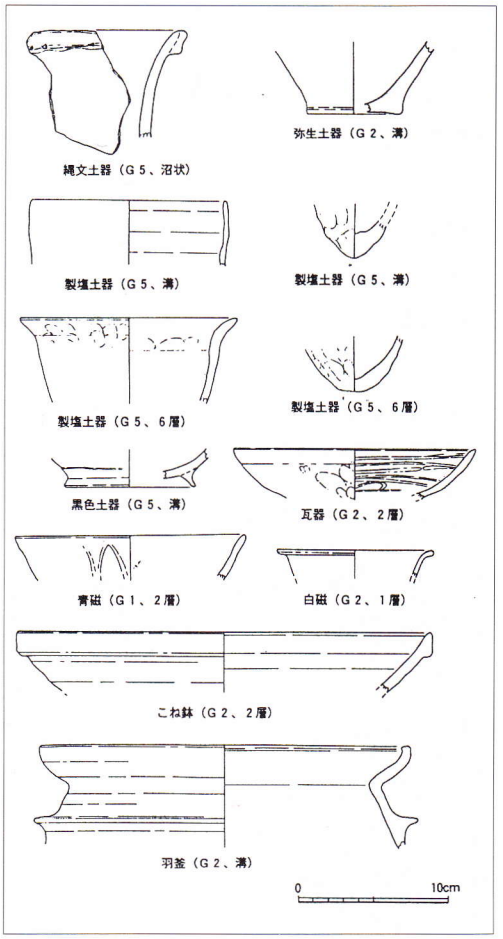
出土遺物の傾向よりみて、本地点において遺跡が本格的に展開するのは鎌倉時代後半で、沼状地形の南側の縁辺部に沿うように溝が掘削されるとともに井戸が構築される。その後、遺物混じりの土が堆積したのちに、畑作に関連する畝溝が多数掘削され、近年にいたるまで畑として利用されたとみられた。

遺構は不明ながら、縄文土器・弥生土器・須恵器・製塩土器・黒色土器も出土することよりみて周辺地に縄文時代から平安時代に至る各時代の遺構が存在するものとみられる。

（前田敬彦）



調査地区配置図（Ｇ１はグリッド１の略号）



出土遺物（カッコ内は出土場所）

16. 鷺ノ森（さぎのもり）遺跡 第1次調査

調 査 地　和歌山市九家ノ丁12
調査面積　70m²

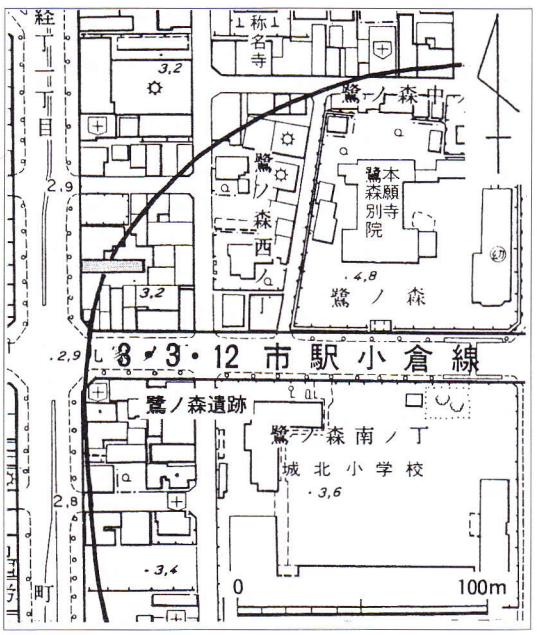
位置と環境

鷺ノ森遺跡は、紀ノ川平野左（南）岸北西部にあり、和歌山市の中心部やや北側に位置する。現在の行政区画では、和歌山市鷺ノ森・鷺ノ森南ノ丁・鷺ノ森西ノ丁・九家ノ丁・西大工町・東鍛冶屋町・西鍛冶屋町などにわたっており、東西約300m、南北約350mの範囲が周知の遺跡として認識されている。現況は市街地である。調査地の現状の標高は海抜2.8mである。

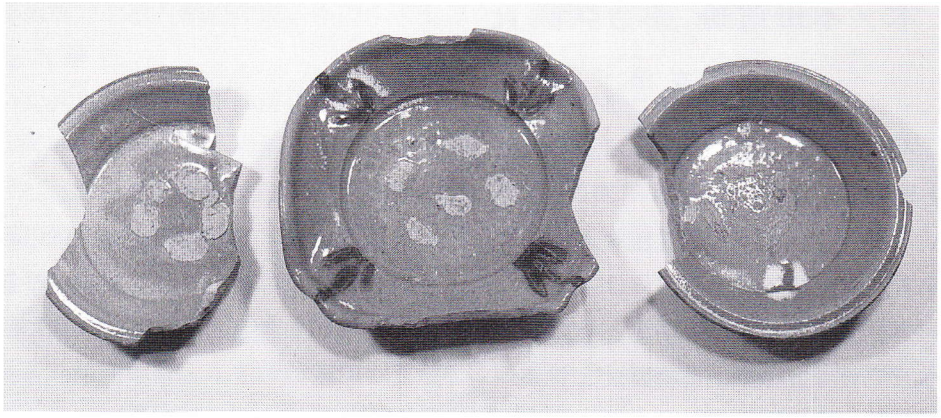
この遺跡が認識される端緒となったのは、1947（昭和22）年頃に各種の土木工事による掘削に伴って出土した遺物が、故・吉備慶三郎氏によって採集されたことによる。これらの遺物のなかには、弥生土器片・須恵器片・土師器片・円筒埴輪片・叩石・凹石などが含まれており、この遺跡は和歌山城下町の一部であると同時に、弥生時代から奈良時代にかけての遺跡と複合した都市遺跡としてとらえることができる(注1)。今回の調査は、マンション建築予定地について実施した。

調 査 内 容

調査に先立って実施した試掘の観察結果から、現地表面から約70cmは第二次世界大戦後の整地層であることがわかったので、この部分を機械掘削した後に調査を実施した。堆積層は表土層を含めて10層に分層できた（11層は自然層と考えられる）が、このうち5層以下を調査対象とした。遺構はほとんどがピットおよび土坑であり、5層・7層・11層の3面が主な遺構面となっている。5層・7層からの掘り込みは比較的小型で性格のよくわからないものが多いが、最下層の11層の土坑は比較的大型で、井戸やゴミ穴と思われる掘り穴を混えている。このほか、調査区域のほぼ中央に南北方向に石積みが検出された。これは、緑色片岩の割り石を7～8段（幅30～50cm、高さ65cm）に積み上げたもので、調査区域の南北へそれぞれ続いている。基底部は9層中に掘肩が確認されたが、どの層から切り込んでいるかは掘り穴が重複しているため確認できなかった。た



調査地の位置



唐津皿類（９層出土）

だ、断面の観察から、この石積みは本来地表面に積み上っていたもので、それが整地層の堆積によって埋没していったものと判断される。

各堆積層から出土した遺物をみると、５～６層は19世紀代のものである。７層からは染付・スリ鉢（丹波系）・灯明皿・京焼などが出土しており、染付丸碗などからみて18世紀代のものと考えられる。８層の遺物はあまり多くないが、17世紀代に遡ると思われる。９層（上層）からは、肥前系の染付・唐津（皿・香炉）・美濃（織部風大皿・志野菊皿）・嬉野系茶碗・京焼（肥前系？）などが出土しており、17世紀中葉すぎの堆積層である。９層（下層）には16世紀末葉の中国産染付や志野、瀬戸美濃系の天目などを混えているものの、肥前系の染付からみて17世紀中葉の堆積層と考えられる。ほかに唐津（大皿・皿・小坏・水指）、織部風大皿、備前茶陶などが出土している。最下層の堆積層である10層からは、やはり16世紀代の中国産染付や白磁を含むが、いわゆる胎土目および砂目の唐津を多く出土しており、17世紀第２四半期以前の堆積層と考えられる。

ま と め

今回の調査では、調査区域が狭いこともあって建物遺構等の明瞭な遺構は検出されなかったが、近世初期以降の各時期にわたる堆積層およびそれらに伴う多くの掘り穴等を確認することができた。出土遺物は、陶磁器類がほとんどであるが、他に瓦類・塩壺・寛永通宝・キセルなどがある。堆積層から出土した遺物を中心として近世における陶磁器類の変遷がたどれるものと思われる。調査区域中央部で検出された石積遺構は18世紀前半に構築されたものと推定されるが、土塀などの基礎であろうか。今回の調査区域は、1563（永禄６）年に創建された本願寺鷺ノ森別院に隣接する個所であるが、総体に堆積層、遺構ともに16世紀代に遡るものはないと判断される。（大野左千夫）

（注１）宮田啓二「城北・加太・有功地区の遺跡および遺物」『和歌山市文化財総合調査報告』（２）　和歌山市教育委員会（1979）

大野左千夫「鷺ノ森遺跡出土の下駄について」『和歌山市立博物館研究紀要』９　和歌山市立博物館（1994）

17. 木ノ本（きのもと）Ⅲ遺跡 第５次調査

調 査 地　和歌山市梅原316－15他
調査面積　45m²

位置と環境

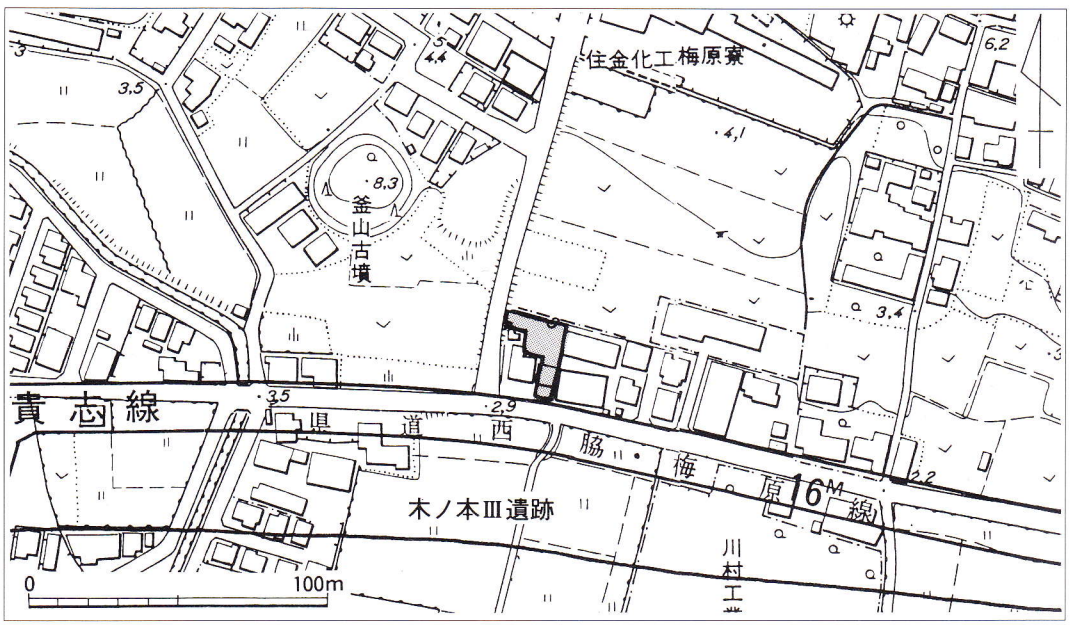
木ノ本Ⅲ遺跡は和泉山脈と紀ノ川に挟まれた低地に東西約４km、南北約400mの範囲で存在する遺跡である。当遺跡には木ノ本古墳群という３基の古墳があり、和歌山県では数少ない平野部に築かれた古墳群として知られている。また当遺跡の周囲には東西に遺跡群が連なっていて、和歌山市の歴史を知るうえで重要な地域である。

今回の調査地点は、木ノ本古墳群の一番東に位置する釜山古墳の南東約50mという近接地であり、釜山古墳に関連した遺構等の存在の可能性が考えられたので、その実態を確認するための調査を行った。

釜山古墳は1958年に和歌山県の史跡指定を受けた直径約40m、高さ約７mの円墳で、1898年の調査の際に純金断片、金銅片、ガラス小玉、土器片、直刀破片、鎧片、鉄鏃、鎗、円筒埴輪片、人骨などが出土している(注1)。また第４次調査で古墳の西側に隣接する畑地を調査した時にも多量の埴輪片や土器片を伴って幅約３mの集石列が古墳に並行して検出されている。

調査内容

本調査は共同住宅建築に先立つ遺跡の実態確認を目的とした発掘調査であり、現在駐車場として使われているところにL字状に調査区を設定し、重機でアスファルト舗装面を含



調査対象地の位置

んだ盛土部分を取り除いた後、人力による掘り下げを行った。

(1) 基本層位

薄い青灰色粘土層の下に炭化粒子や少量の土器片を含んだ暗灰黄色砂泥層があり、その下には灰褐色砂層が厚く堆積していて遺物などは殆ど見られなかった。地表から約１ｍ掘り下げたところでまわりから水が湧き出し、それ以上の掘り下げがむずかしくなったので、灰褐色砂層がまだ下に続いていることを確認して作業を中止した。

(2) 遺　　構

北側は近年の撹乱などによってよくわからなかったが、南側では東西方向に走る幅約４ｍの大きな溝状の落込みを検出した。しかしその堆積土からは炭化粒子などが観察されただけで、土器などの遺物はなかった。

(3) 出土遺物

暗灰黄色砂泥層内に土師器、瓦器、陶器、磁器、瓦などの細片が少量含まれており、中世以降のものと思われる。

ま と め

以上のように今回の調査では調査区の南側で東西方向の溝状遺構が検出された。しかし遺構に伴う遺物が出土していないので時代ははっきりしないが、遺物包含層の暗灰黄色砂泥とよく似た質の堆積土であったのでおそらくは中世以降であろう。溝については釜山古墳とは直接の関係はないと思われるが、中世における古墳周辺の地形の一端を確認できたことは、当時の生活環境を知るうえで貴重な成果であった。

最近木ノ本地区周辺における発掘調査が増えてきており、この地域の実態が徐々にあきらかになってきている。その中の１つにベースとなっている褐色系砂層がかなり起伏のある地形を形成していることがわかってきた。本調査を含めた今後の細かな観察によって当地域の旧地形がはっきりと浮かび上がってくるであろう。　　（益田雅司）

（注１）岩西忠一「木ノ本古墳」『和歌山県史蹟名勝記念物調査報告』第９冊（1930）

18. 菖蒲谷遺跡（しょうぶだに） 確認調査

調 査 地　和歌山市井戸329－１他

調査面積　30m²

位置と環境

菖蒲谷遺跡が所在する和歌山市井戸は和歌山平野の南端部、西を除く三方を山に囲まれた盆地状地形の東端に位置する。当遺跡の所在する千石山は大旗山から西に派生する丘陵の突端にある独立丘陵で、ほかにも千石山遺跡・井戸遺跡、千石山古墳群や井戸古墳群など弥生時代から古墳時代にかけての遺跡群が存在している。

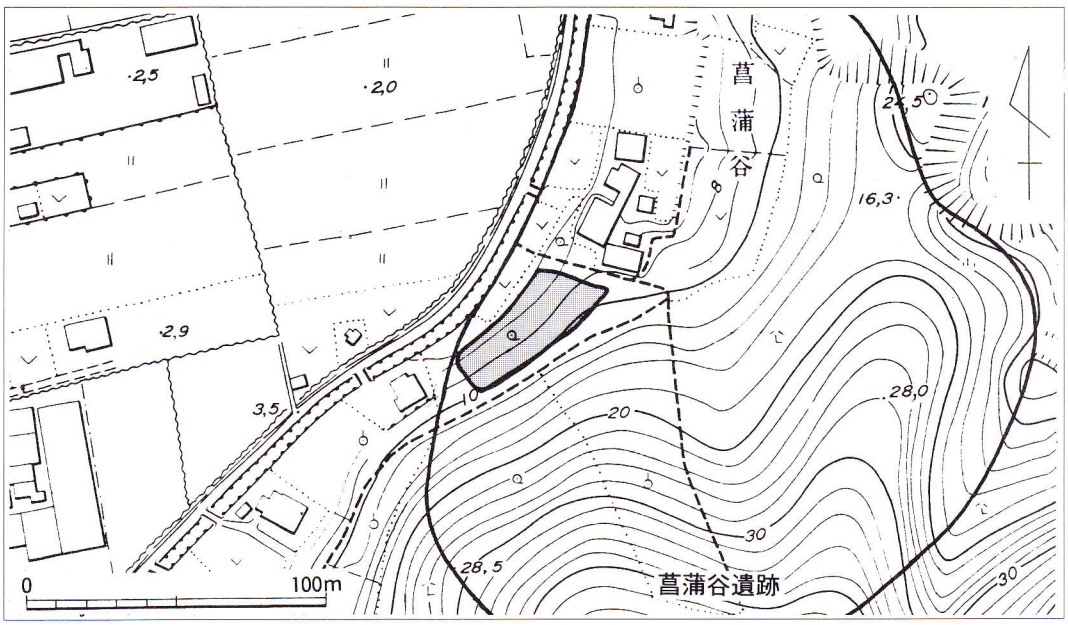
菖蒲谷遺跡は1987年に和歌山県教育委員会が千石山古墳群とともに発掘調査を行い、その時の調査では弥生時代から古墳時代にかけての台状墓や土坑墓が多数検出され、それに伴う土器などの遺物が大量に出土している。

調 査 内 容

今回の調査は千石山の北側斜面の裾部にあたり、和歌山県教育委員会の調査地点の西側にあたることから墓域が西に延びている可能性が考えられたことから、確認のための調査を行った。

調査は山の斜面に沿って幅１mのトレンチを設け、人力による掘り下げを行った。どちらも堆積土は殆どなく、表土の下はすぐ地山であった。

遺構は第２トレンチの南側、山の中腹付近で斜めにはしる幅約80cm・深さ約30cmの溝を検出した。底部近くから土師器片や瓦器片などが数点出土した。瓦器については13世紀

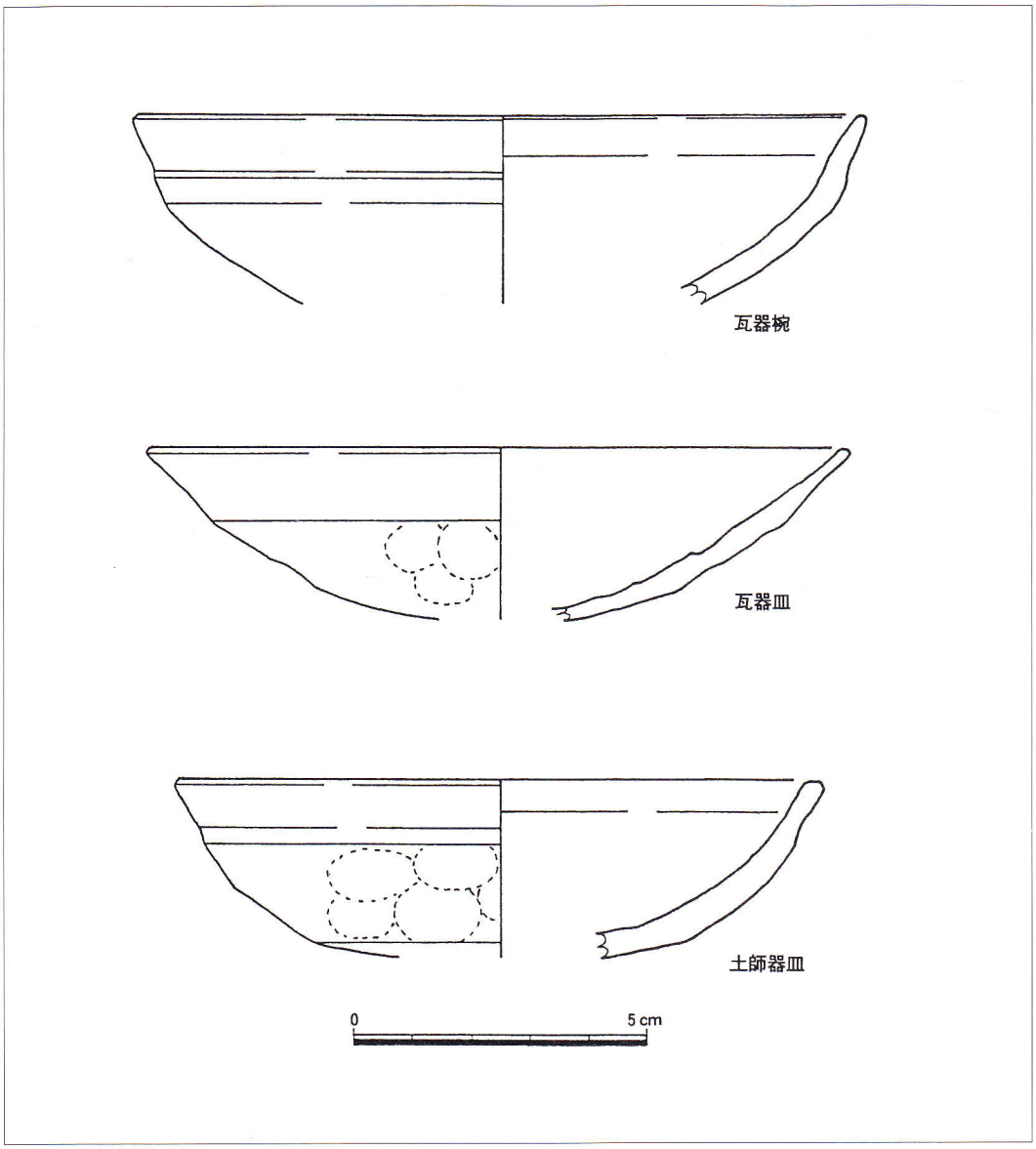


調査対象地の位置

代のものと思われる。

ま と め

当地域では弥生時代から古墳時代にかけての遺物の出土が顕著であるが、今回の調査で中世以降の遺物が出土したことは重要である。特に千石山の中腹で溝に伴って出土したことは、古墳時代に墓域とされていた当地の中世以降の在り方に新たな視点を見い出したことになる。そして周辺地域の実態究明を含めた今後の調査結果に期待したい。(益田雅司)



出土遺物

19. 木ノ本（きのもと）Ⅲ遺跡 第６次調査

調 査 地　和歌山市木ノ本560－２
調査面積　32m²

位置と環境

木ノ本Ⅲ遺跡は和歌山平野北西部、和泉山脈と接する標高約３mに位置する遺跡で、東西約４km、南北約400mを測る。当遺跡のほかに周辺には西庄遺跡、木ノ本Ⅰ遺跡、木ノ本Ⅱ遺跡、木ノ本経塚、木ノ本古墳群などの遺跡群が連なっている。

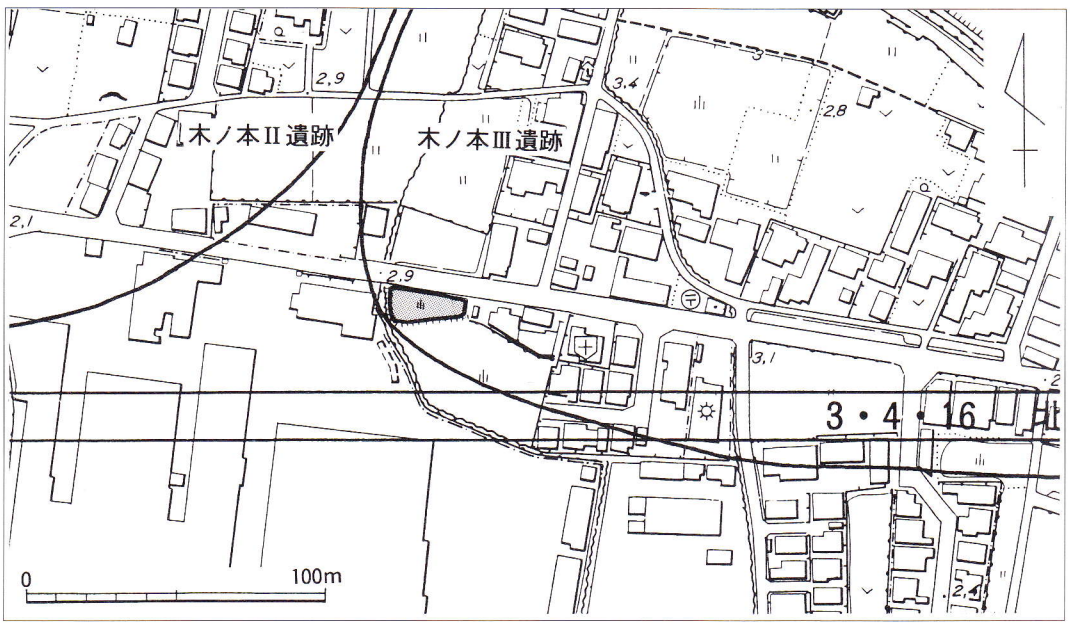
今回の調査地点は木ノ本Ⅲ遺跡の南西端にあたり、木ノ本Ⅱ遺跡と接するところにあたり、近年この周辺を調査した際に中世を中心とした遺構や遺物が確認されている。

調 査 内 容

本調査は共同住宅建築に先立つ遺跡の実態確認を目的とした発掘調査で、予定地内に幅２mのトレンチを東西方向に約16mの長さで設け、重機で盛土を取り除いた後旧耕作土からは人力による掘り下げを行った。作業中旧耕作土上面から水が流れ込み、随時水中ポンプによる排水が必要であった。また盛土が砂であったために水の流入による土砂崩れを伴ってなかなか作業が進まなかった。

(1) 基 本 層 位

旧耕作土の下に土器片を含んだ青灰色砂泥があり、遺物包含層の下は暗紫灰色粘土で、その下は暗灰青色砂となる。各層位の厚さは盛土約１m、旧耕作土約15cm、青灰色砂泥（遺物包含層）約10cm、暗紫灰色粘土約20cmとなり、複雑な層位は示さずにほぼ平行に



調査対象地の位置

堆積していた。なお溝状遺構１とした遺構内には暗灰黄色砂泥が堆積していた。

(2) 遺　　構

暗紫灰色粘土上面で南北方向に延びる２条の溝状遺構を検出した。どちらも上部が削失されていて底の部分だけであった。

溝状遺構１としたものは幅約４ｍを測り、底面は一定ではなく西側は浅くて東側がやや深い。

溝状遺構２としたものは広いところで幅約１ｍ、深さは約５cmを測る。底部は平坦でおそらく断面Ｕ字形の溝であったと思われる。

(3) 出土遺物

遺物包含層である青灰色砂泥から土師器、瓦器、瓦などの細片が少量出土したが、時期を決めるまでの資料は得られなかった。

ま と め

今回は限られた面積で、しかも湧水に悩まされながらの調査であったが、暗紫灰色粘土上面で南北に延びる２条の溝状遺構を確認することができた。どちらも底部しか残っておらず少なくとも溝状遺構１は溝状遺構２より古いと考えられるが、出土した遺物を見る限りは双方の時代差はあまりないようである。

中世の土器片が少量確認できたことは、中世において当地域周辺で生活を営んでいた可能性を示しており、注意を払う必要がある。

近年木ノ本地区を調査する機会が増加し、その実態が徐々に判明してきている。その中で大きな特徴として旧地形がかなり複雑であったことがあげられる。特に本調査地周辺は100mも離れるとまったく異なった地形が形成されていて、予想の困難な地域であることがわかってきた。今後も調査を重ねることでよりはっきりした旧地形が判明されることを望むものである。

（益田雅司）

20. 鳴神(なるかみ)Ⅳ遺跡 第３次調査

調 査 地　和歌山市鳴神968－１他

調査面積　200m²

位置と環境

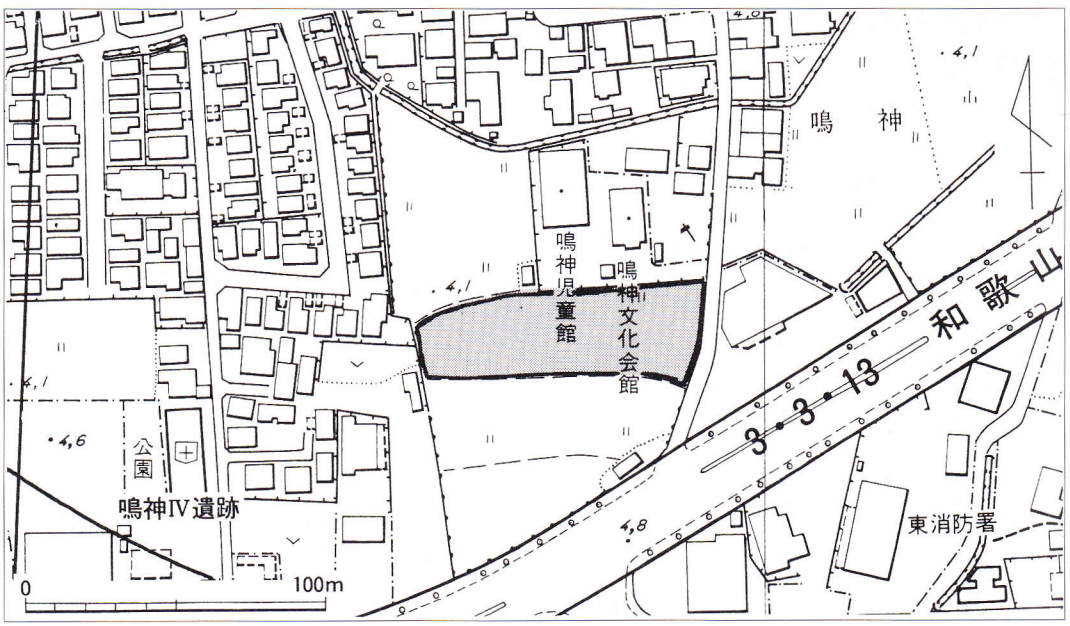
紀ノ川下流域の南部に位置する鳴神地区は、和歌山市の中でも遺跡が密集した地域である。その１つ鳴神Ⅳ遺跡は東西500m・南北375mにわたり、花山丘陵の西端部に接して存在する古墳時代を中心とした遺物散布地である。当遺跡では1977年から1979年にかけて国道24号線のバイパス建設工事に伴う発掘調査が和歌山県教育委員会によって行われ(注1)、その際に古墳時代の大小の溝や掘立柱建物・井戸・土坑などが検出され、各種の遺物も数多く出土している。

調 査 内 容

当遺跡南部の耕作地において宅地造成が計画されたことに伴い、過去に和歌山県教育委員会が実施した近接地の発掘調査の結果を踏まえて当該地における遺跡の実態を確認するための調査を行った。調査は地割りに合わせて東西86m・南北2.5mのトレンチを設定し、重機で耕作土を取り除き、後は人力による掘り下げを行った。

(1) 基 本 層 位

耕作土自体が薄くてすでに細かな土器片がかなり含まれていたが、耕作土直下から黄灰色系粘質土の遺物包含層が約30～60cmの幅で堆積していた。よく観察すると何層かの耕作土が細かく重なった状態を示していた。上層遺構面を挟んで灰黄色系粘質土の遺物包含



調査対象地の位置

層が続き、その下に中層遺構面の暗褐色系粘質土層、下層遺構面の黄灰色粘質土、灰青色系強粘土層、暗灰色系砂層と順次下がって行く。西側は比較的安定した堆積を示していたが、東側については一部包含層下の灰茶色系砂層から水が湧き出して壁が崩れてしまって調査を続けることができなかった。

(2) 遺　　構

3面確認したが、検出したのはいずれも溝状の掘り込みであった。上層（SD1～7）で南北方向に延びるものが6条、これらにほぼ直交するかたちで東西方向に延びるものを1条検出した。すべて幅が狭く断面が浅いU字形をしている。南北方向の溝群はほとんど平行に並んでいるが、間隔は不規則である。中層（SD8～10）は西側に3条かたまって検出した。幅約1m・深さ50～70cmで、SD8はゆるいV字、SD9はV字、SD10はU字形の断面を呈している。いずれも南東・北西方向に延びる。下層（SD11～13）は3条検出した。SD11は幅約3.5m・深さ約50cmを測り、底は平坦に近い。SD12は幅約3.7m・深さ約60cmを測りゆるいV字形を呈する。SD13は幅約4m・深さ約90cmを測りゆるいV字形を呈する。SD11・12が南東・北西方向に延びるのに対し、SD13は南北・北東方向に延びている。東端で砂層の堆積する大溝を確認したが、壁が湧水で崩れてしまったので観察できなかったが、少なくとも幅4m以上・深さ約1mの規模を有し、遺物も少なからず出土している。

(3) 出土遺物

コンテナに2箱分の土器片を出土したが、ほとんどが包含層内からであり、いずれも細片であった。土師器・須恵器・瓦器・瓦・輸入陶磁器・国産陶磁器など古墳時代から近世にいたる多種多様なものが含まれていた。

ま と め

限られた範囲での調査であったが、3時期の遺構面を確認することができた。いずれも溝状遺構の検出であり、以前和歌山県教育委員会が行った調査で得られた結果との関連性を考える必要がある。特に東側で確認した大溝やSD11～13などはその規模からも可能性が高く、そういった溝状遺構を確認したことは歴史的地形を復元する上で貴重な資料となる。

（益田雅司）

（注1）『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』　和歌山県教育委員会（1984）

Ⅲ. 普及啓発活動

1．書籍刊行

埋蔵文化財の発掘調査報告書を刊行し、関係機関等へ配布した。

『鳴神Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書』（平成２年３月）

2．和歌山市文化財ニュース発行

文化財に対しての理解を深めてもらうために、市内の小中学校と一般の方々を対象にして本年度より『和歌山市文化財ニュース』を不定期に発行することとした。昭和63（1988）年度と平成元（1989）年度に発行したものは以下の通りである。

『和歌山市文化財ニュース』No.1（1989年１月）　和歌山城の発掘
『和歌山市文化財ニュース』No.2（1989年２月）　奥山田遺跡の発掘
『和歌山市文化財ニュース』No.3（1989年４月）　奥山田遺跡の発掘　その２
『和歌山市文化財ニュース』No.4（1989年９月）　奥山田遺跡の発掘　その３
『和歌山市文化財ニュース』No.5（1989年10月）　奥山田遺跡の発掘　その４

3．文化財講演会開催

第４回和歌山市文化財講演会を開催した。

平成元（1990）年１月21日（土）市民会館（参加者約200名）

講師　佐原　眞氏（奈良国立文化財研究所　埋蔵文化財センター研究指導部長）

演題　「縄紋人・弥生人とわたしたち」

4．現地説明会開催

和歌山市教育委員会と共催で発掘調査の現地説明会を実施した。

昭和63（1988）年５月７日（土）

太田・黒田遺跡（第22次調査）現地説明会（参加者約30名）

太田・黒田遺跡（第22次調査）現地説明会

平成４年３月31発行

和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報１

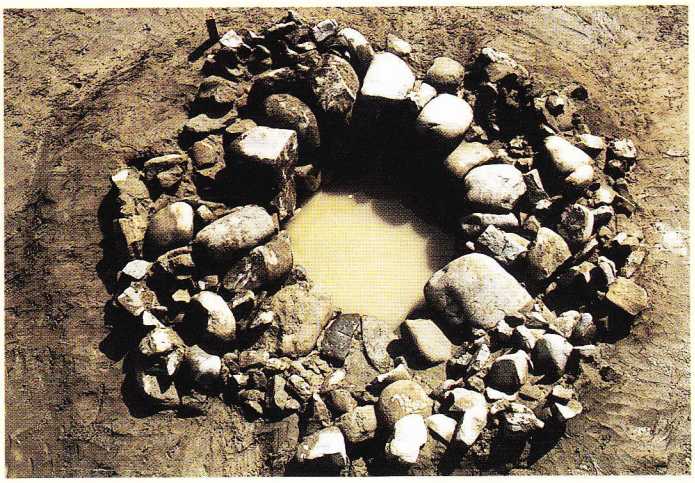
―昭和63（1988）・平成元（1989）年度―

編集・発行　㈶和歌山市文化体育振興事業団

和歌山市西汀丁29番地

印　　刷　西岡総合印刷株式会社

© ㈶和歌山市文化体育振興事業団 1992



木ノ本Ⅲ遺跡第３次調査　井戸